[illegible]

勝間白人著

鳴皐書院

146
699
特
2

特64
298

蜀山人

蜀山の人物

勝間舟人著

徳川治下三百年の泰平は。世に特種の人物を産出せり。太田蜀山の如き。蓋し其磊落の一たり。彼が生涯は光風霽月の如し。彼が言行は豪放不羈なりし。彼が舌は能く世を嘲笑し。彼が筆は常に鋭く之を痛刺せり。人或は彼が眞面目ならざるの故に。彼を以て凡庸の俗人となせども。安ぞ知らん彼が眞價は。却つて其不眞面目の間に存する事を。

彼は世に捨てられて。歸田園を歌ふべき人物にあらず。世人醉ふの時

彼も亦醉へり。世人歌ふの時彼も亦歌へり。彼は厭世主義の人物に非ずして。寧ろ樂天主義の詩人たりしなり。彼は富貴を解せず。貧賤に苦まず。生ある處常に樂あり。此樂は以て童幼婦女を導き野夫走卒をも敎ゆべしと信ぜしなり。彼は社會の下層に注目せり。猶上流にも注目したりき。注目すると同時に其懸隔の餘りに非常なるを見出せり。故に下層と上流との和樂を求めたりき。彼が眼中王公も無く貴族もなく。穢多もなく乞食もなかりき。唯人類あるのみ。然して此等人類の。或は利祿を求め。或は爵位を欲して。二六時中更に間斷なく。互に仇敵の思をなして。相戰ひ相爭ふを認めぬ。彼等は利の爲めに父母を忘れ妻子を捨て。兄弟あるなく朋友あるなく。齷齪として奔走するの狀を憐めり。茲に於て彼が希望は熱せざる能はざりき。彼は彼が最大主義として一の金言をなせり。『常に笑ふの人は幸なるかな』と。人類の總てをして無邪氣ある事小兒の如く。愛らしき笑を其顏にたゝへしめて。以て陽々たる新天地を見出さんとせり。宜哉彼が歌ふ處のもの悉くこれ奇警。彼が行ふ處人意の表に出ざるもの稀なりしや。

逢レ佛殺レ佛。逢レ祖殺レ祖。逢二布子一殺二布子一。逢二蚊屋一殺二蚊屋一。

過二八箇月一始得二解說一

これ彼が禪僧に示すと題せる一語なり。當時佛徒の腐敗日に甚しく。戒行自ら亂れ。法規やうやく弛く。破戒滅法の徒多きを誡むるの語にあらずや。又且つて彼書畫帖の序に記して曰く。口より出るを詩歌といひ。尻より出るをれならといふ。唯おならのみ臭きにあらず。詩歌にも亦わるぐさきあり。唐一代を四ッ割にして。初盛中晩の階子屁といひしも。盛唐くさきの僞唐くさい

のと。ブウ〳〵をひりちらして。今は放翁誠齋のすかし屁をこく世とはなりぬ。やまと歌は馬鹿律義にして。ならの葉のおならの外は。草庵集や新題林をにぎり屁の。にぎりつめて。おもしろく候をかしく候と。屁玉のやうな御放屁をいたゞくもをかし。こゝに狂歌こそをかしきものなれ。師傳もなく秘説もなし。和歌より出でゝ。和歌よりをかしく。藍より出でし青飄たん。そのつる四方にはびこりて。性はせんなり飄簞の丸ののゝ字をかくばかり。二百五十の同庵が。やきもちをやく事とはなりぬ。いらざる老のにくまれ口。こゝらで筆をとめきのかほり。自讃くさいは。臭いもの身しらずとてもいひなさへ。

此放逸なる筆端に。彼は世の詩客と唱へ歌人と稱するの輩が一意古人を崇拜して。主義もなく主張もなく。これを摸擬し。これを飄竊し。更に一新機軸を出すの技量なきを嘲けれり。彼は到底其糟粕に甘んずるの輩。共に語るべからずとなせるなり。

今や彼が樂天の詩趣一二を見ん。

蠶きせ米をくはせて花までも
　見よと造化のいかい御造作
かひこ庵に酒のみて
山まゆのいとひきいだすかひこ庵
　えひての夢は蝶とこそあれ

題壁（明和三年丙戌作時歳十八）

生長牛門十八秋。濁酒彈琴拊レ髀遊。
人生上壽縱滿レ百。三萬六千日悠々。
功名富貴浮雲似。笑他文繡羨二犧牛一。

満堂盡是同懐子。　無レ酒須レ典二我貂裘一。
濁酒一杯琴一曲。　一杯一曲忘二我憂一。
時人若問二行樂意一。　萬年江漢向レ東流。

彼は既に角前髪の時代に於て。樂天的詩家たるの思想を發揮したり。彼が生涯に於て不平の文字なく。不滿の言語なし。唯彼が一世一代の愚痴とも見るべきは。彼が著書奴凧の卷尾記せるもの一あるのみ。曰く

つら〱思へば。老病ほど。見たくでもあき。いま〱しきものはあらじ。家内のものにはあきられて。よく取あつかふものもなし。われ四年前。戊寅きさらぎ十八日。登營の道すがら。神田橋の内にてつまづきころびし後。葉月十日に血をはきしより元のすこやかに立かへるべくもあらず。酒のみても腹ふくるゝのみにて。

ほろえひに至らず。物事にうみ退屈して面白からず。聲色のたのしみもなく。たゞねるをもて樂とす。奇書も見るに足らず。珍事もきくにあきぬ。若き時酒のみて。とろ〱ねふりし心地と。馴れたる妓のもとに通ひし樂は。世をへだてたる如くありき。

　ながらへば寅卯辰巳やしのばれん
　　うしとみし年今はこひしき

彼が如き洒々磊々たる樂天家たりといへども。終に足腰不自由なる老病の苦に責られて。此愚痴をもらすに至りぬ。去れど單に此一點をとつて。彼を樂天家にあらずと評する程の價値あるに非ず。これ人類に及ぼす病魔の發作に歸すべきものなればなり。此老病は彼が飲酒の害より生せし處なりといへる人あれども。彼は決して然かく暴飲せるにあらず。彼が著萬紫千紅中に曰く

飲酒法令

酒はのむべし。酒はのむべからず。

一節供祝儀にはのむ

一珍客あればのむ

一肴あればのむ

一月雪花の興あればのむ

一二日酔の醒をとくにはひとりのむ

この外群飲佚遊長夜の宴終日の宴を禁ず。童謡に曰く。おまへその様に酒のんで猩々にならんす下心。猩々よくのめども禽獸をはなれず。人として禽獸にだも鹿猿べけんや。以て彼が暴飲家にあらざりしを知ると同時に。酒々磊々たるが内に又自ら整然たる自制の念ありしを知るに足らん。

猶は彼が人物及其理想に關しては。逐次章を重ねて彼を咀嚼するの間に。自ら得る處あるべし。余今玆にこれを詳說するを惜む。

●蜀山人が享けたる教育

太田蜀山幼名を直次郎と稱し。後七左衛門と改む。諱は覃。字は子耜。蜀山は其號なり。(南畑。杏花園。寢惚先生。四方赤良。其他石楠齋。惰農子。樵歌亭。玉川漁翁等の別號あり。)父を太田吉右衛門正智と呼び。自得翁は其號たり。世々徒士の職を奉じ微祿の小身たりしとはいへども。氣節又自ら庸俗に等しからず。白山本念寺なる翁が墓碑に記して曰く。(撰者南紀關禎)

君爲人恬靜質直。行潔言遜。左官三十餘年。未敢闕直。凡見人患難。百計思濟。甚於已私親戚義。故多蔭子德字者焉。愛酒不過微

酔。愛花不好异卉。日渉園圃。或栞蔬以爲藥。又崇信釋氏。而不讀經。唯觀誦法華經題。嘗曰。吾念經題。充法華三千部字數。則志願異异矣。云々

又曰く

知君二十餘年。未嘗見其疾言遽色。又未見汲々戚々之狀焉。溫克撲素。寡慾安分。云々

と以て蜀山が父たる自得翁を知ると同時に。蜀山が彼の父に因つて。如何に薫陶感化せられたるかを知るに足らん。溫克撲素。寡欲安分これ蜀山が常に信仰せる處の題目なりき。自得翁常に文事に志を注ぎ平日蜀山及二姉一弟を誡めて曰く。人に文あること猶ほ木に花あるが如しと。蜀山生れて穎悟（寛延二年春三月三日。江戸牛込仲徒町の邸に生る）幼にして學に志し。砌磋錐膝夙に同學に鋭脱する處

あり。漸長するに及びて。詩歌文章の才自ら四筵を驚す。去れど一家六人。婢僕すらも養ふに苦しめる小祿の家に生れて。衣に在らず。食にあらず。蜀山が常に憂ふる處は。良書の缺乏にあり。彼は戀人を求むが如くこれを求め。万般の困難を排して。これと相親しみ相馴れんとせり。彼が欲する處の書を得るや。飢人の食を得たるが如く。悉くこれを腹中に藏めずんば飽かざりしなり。

彼が世に遺したる著書の過半は。實に螢雪の餘瀝たり。否彼は彼が如き小身の士。彼が如き好書の士に對して。大に益する所あらんとして。かくは多くの隨筆的著書ありしなり。世人の熟知せる一話一言の如き以て見るべし。一話一言三十餘卷の大部は。彼が如何に苦學せしかの消息を傳へて餘りあり。彼れ彼が著書南畑芳言に序して曰く。

予幼好讀書。家貧乏書。或借請人。或閲諸市。中歳節縮衣食。購得書卷。世故紛紜。老亦至矣。自少至老。抄書不倦。遇見瞥觀。皆即疏記。積爲數卷。菅公不云乎。學問之道。抄出爲宗。予竊欽焉。文寶亭見而悦之。（文寶亭は門人）與書餘衆星閣謀。隨抄隨刻。旦々示之。流觀一過。不復詮次。南畑之田。不啻有遺秋滯穗。其於稜苑也。若苗之有莠也。名曰莠言爲之也。吁。歳垂七十。而不發一見。不爲一事。此驕々者。亦是自口。固不足取笑於大方也。恐指摘於考據之家矣。唯使吾家兒孫。謂祖翁亦解讀書則可矣。丁丑小春。杏花園主人識

と彼は一種の學者の如く其貧困を衒ふものに非ず。これに依つて苦學を吹聽し。以て金箔をかゞやかさんとするが如き野心ある事なし。彼よりして謙遜の二字を除却せよ。彼は剝出しなる人間なり。天眞

爛熳化粧なき無垢の人物のみ。

彼の教育は師よりして來りしよりも。父よりして得たるよりも。寧ろ黽勉自修せしものといふべきなり。若し强て其師たりし人を求めば。内山賀邸。劉龍門。澤田東江等の數人ならん。

彼が一世を風靡せる狂歌の神髄は。實に内山賀邸の門に修めたる和歌よりして來れる所のものたるなり。其和歌より來るの故を以て。風韻又决して凡ならず。

一めんの花は碁盤の上野山
　黑門前にかゝる白雪

去年から氣をはりつめし氷室守
　今宵や心とけ〳〵とねん

秋の田のかりほの庵の歌かるた

　　手もとにありて知れぬ茸狩
世の中はわれより先に用のある
　　人の足跡橋の上の霜
れさらばとろむけし顔をむき玉子
　　きぬぐ〱糸のきるにきられず
文月のふみもや通ふ神無月
　　うらをかへして遊ぶ赤壁

等の句に至つては。其妙其奇決して和歌。俳句の及ぶべき所にあらず。然るに今日の狂歌師と稱するもの。唯先人の糟粕をのみ甘んじて卑俗に走り淫猥に陷り。今や次第に衰微の運に向へり。古より名人と稱せられ。一派の師宗と稱せらるゝの人は。自ら素養見識他に異なる處あり。以て神に至り妙に達すべし。書家然り。畫家然り。

其他一として然らざるものあらず。

蜀山	和歌	狂歌
狂歌師	狂歌	〇〇
岩佐又兵衛	文人畫	浮世繪
浮世繪師	浮世繪	〇〇〇
日蓮	佛教	日蓮宗
蓮宗僧	日蓮宗	〇〇〇

右に假定せる表について見よ。蜀山は狂歌を巧にせると又兵衛の文人畫に於ける。日蓮の佛教に於けるが如し其狂歌をなすもの。又兵衛の浮世繪たり。日蓮の日蓮宗たり。今今日の狂歌師と稱するの輩に至りては。浮世繪師の浮世繪以外に知る處なきが如く。蓮宗坊主の日蓮宗以外に教理あるを知らざる如く。一點和歌の何者たるを解

するものあることなし。故に風韻あるなく雅趣あるなく。賤劣底止する處なきに至らんとす。

詩を彼が學びたるは劉龍門にして。尤も彼が私淑せしは澤田東江なるが如し。奴師勞之に曰く。

明和のはじめ。牛門の四支と稱せし岡部平次郎（名正懋字公修號四溟後削髮號素觀）大森見昌（名彝倫字君叙號華山）菊地角藏（名禎字叔成號匡廬）など東江先生を迎へて。目白臺の潺々亭といふにあそび。酒もりせし時。此あたりに白馬人といへる醉客來りて。座中の客を罵りしかば。我ひそかに其兄を呼びてかへせし事あり。東江は至つて臆病なる人なりしかば。かゝるもの又も狗竇より來つて。さわがせんも計りがたし早く此所を立去るべしとて。牛門岡部氏の嘯月樓にかへりて又々酒酌交せし時予狂詩をつくれり。

諸君斜曲レ背。白馬橫推レ車。已及二戰場一處。逃歸二岡部家一。

東江先生八町堀地藏橋に居し時。門人いまだ少かりしかば。正月の會はじめに。岡部公修と共に來るべきよしといひければ。ゆきしに日向氏其外十餘人ありき。吉原大金といふもの作りしとて。板下のまゝ見せられき。かつて唐詩選の句と。百人一首の下の句を合せて。青樓の事をしるし。異素六帖といへる小本を著したるなど物語あり。其座にて池の端の須原屋伊八が番頭廷平といふものに逢ひしが。萬載狂歌集の約束して。終に其書をかきて送れり。

又假名世說に同事を記せり。唯其異なる點のみを摘記すれば。

東江先生（名は鱗字は文龍澤田文次と稱す）云々。先生大におそれかゝる者又も狗竇より來りて云々。山伏町の嘯月樓云々。

且つ狂詩の後に附記して曰く。

先生此詩を見て大笑せられき。此後先生の雷名四方に轟き。日々發行して染筆を乞ふもの門前市をなし。貴となく賤となく其手跡を學ばざるものはなかりき。

これによつてこれを見るに。蜀山が東江を以つて先輩とし。其敎をこふ處ありしには相違なかるべきも。決して世俗の所謂師弟にはあらざりしが如し。性來蜀山はまけぬ氣の男にして。當時の名儒碩學に膝を屈するを好まず。去ればとて獨學も非常に困難なるの故を以て。東江其人の如き。學才ありて坊間に埋れつる者を求め。友人として先輩として。交際を結べるなり。彼が先生と稱するの意味は先輩と稱するの意味なり。師と稱するの故にあらず。

東江先生八町堀に在りし時。門人いまだ少なかりしかば。正月の

會はじめに。岡部氏と共に云々。

の語東江と蜀山とが間に於ける關係を說明し得て餘りあるべし。又蜀山は松崎觀海（名惟時字若修丹波人）に師事せり。蜀山が心を傾けて師事せしは蓋し賀邸觀海のみなるべし。假名世說に曰ふ。

子式（本姓高野名は維馨字子式蘭亭と號す東都人）云君修十三歲の時。東都に來りて先づ子式に謁す。其時十三經など一周覽し。大抵古書はよく讀みて。大學致知格物の說なども議論ありて。經義はなか〳〵人にゆづらず。と古人を排擊して甚才にほこれり。誠に神童なれども。あの才氣增長せば。自負に過ぎていかなる人になるべきや。大かたは惡しき人になるべきと思ひたるに。春臺とは（大宰春台をいふ）子允かねて心やすきゆゑ。賴み入申さんとありしかば。尤しかるべしといひて。春臺の門人になられたる

が。春臺のきびしき人に逢ひたるゆゑか。今に至りて才氣よき人になり。見事の人物になりいかにも人品よき君子になられたりと。子式くりかへし賞められたり。子式又いふ春臺の門人は。才も不才も人品れとなしき事なり是春臺の手柄といへり。故に其學識に至りては。到底東江などの及ぶ所にはあらざりしなるべし。蜀山詩あり。

九日同岡公修載酒過劉文翼先生會松崎観海先生至得盤字

無恙陶家九烏觀。更迎二上客一宦情寛。風吹二綠鬢一兵歆二鳥帽一。露冷黃花映二玉盤一。何處登レ高工作レ賦。一時攜レ酒醉相看。東籬此會應レ難レ遇。遮莫林端月色寒。

早春観海先生邸舍集得春字

此日高堂宴。銜レ杯眺二早春一。神門佳氣外。雉堞御溝濱。草輿二玄

經レ長。花窺二絳帳一新。不レ須二南部妓一。已醉二問奇人一。

此他観海先生を哭するの二首文翼先生を哭するの詩等あり。又聊か參考に資するを得ん。

又蜀山は師につきて學びしよりも多くは獨學の辛苦をなめたる間に。益友として多くの人物を得たり。ゐは交遊の章に於て詳説せん。

要するに彼の受けたる教育は不規則たりし。彼の學は博しといへども頗る淺薄なりき。この不規則なる教育淺薄ながら該博なる學問は。却つて蜀山其人をつくるの好資にして。若し彼れ整然たる教育をうけ志を深遠の學理に走せたりしならば。啻にそれ一俗儒太田覃ありしのみ。

●蜀山の言行

蜀山の言行は常に世の嘖々として傳ふる處。或は異裝人目を驚かせりといひ。或は奇言抱腹絶倒せしむといふ。然れども其多くは好奇者の捏造にかゝり。信んずべきもの殆んど稀なり。今一二をかゝげて彼が言行の勿論尋常にあらざりしを見ん。然れども讀者よ彼が言行は。一九の如く三馬の如く。奇突人を驚すといふよりは。寧ろ剛直謙嚴なりし事を記せよ。

當時中本膝栗毛の作者として世に持囃されたる十遍舍一九(姓重田)蜀山の盛名をきゝ。其爲人の慕しさに。一度相見て語りて見ばやと或日其門に至り。吾れ先生の盛名をきく事久し。去れど未だ其折を得ずして。豊容に接するあたはず。かくて過ぎなば又いつの日かて

のうらみを解くべき。故に無禮ながら今日先生に拜謁せんとて推參せり。と常になぐつゝしみて取次をたのみたり。取次の者肯きて。幸ひ今日は先生も在宅なり。暫くそれに待たせ給へと言捨てゝ奥に入りしが。待てども／＼再び出で來らず。一九怒つて曰く。南畝何者ぞ。これ一賤士たるのみ。然も僅に文筆を解するの故を以て。何ぞ人におごるの甚しき。我れかゝる者としりせば。態々尋ねまじかりしにと。袖を拂つてかへりけり。

後蜀山と一九と相逢ふ事あり。一九なじつて曰く。先生先に何ぞ余をくるしむるや。蜀山曰く何ぞ雅兄先に余を弄ぶやと。一九これを望んで其故をとふ。蜀山曰く。余雅兄の高名を聞く事久し。幸にして我草屋をとはる。いかで一瓶の饗なかるべけんや。去れど當時沽酒の錢に乏し。庭中に一桐樹あり。これを近隣の造履家に售り。忽

ちに數百錢を得たり。兄と快飲するの料餘りあり。走つて家にかへれば兄既に去つてあらず。これ余を弄ぶにあらずや。と一九呆然として一語なかりしといふ。

蜀山が家に多年召使へる老僕あり。名をば逸助といふ。其性樸直。蜀山頗るこれを愛す。逸助年老ひて洒掃の勞にたえず。蜀山これを憐み與ふるに若干の資を以てし。商を營み自ら給せしむ。逸助商利に敏ならず。數々其業を改め。數々失敗す。其都度彼は來つて哀を乞へり。

一日逸助來つて蜀山を見る。蜀山曰く。汝何すれぞ來る。それ資を求むるに在らざるなからんやと。逸助の曰く否。僕が家なる壁悉く敗壞せり。今これを糊補せんとす。因つて故紙を大人に乞はんと欲して來れるのみ。蜀山笑つて曰く能し。吾これを汝に與へんと。几

上にある所の紙等を集めてこれに與ふ。逸助拜謝これを懷にしてかへる。途上門人某に會す。某の曰く。逸助爺何處に往く。逸助曰く。先生を訪へるのみ。某曰く其懷にせる物は何ぞ。逸助曰く。壁剝落する事甚し。故にこれを補理せんとして先生に敗紙を乞ふ。これ先生が僕に與ふ處なりと。某とつてこれを見るに。悉くこれ文章詩歌。奇想奔逸者珍とすべし。某驚いて曰く。これ補壁の料にあらず。爺幸にこれを余に分たんか。余これに報ずるに數金を以つてせん。逸助莞爾として曰く。僕の幸これに過ぎたるなし。去れど先づ去つて先生に問ふべしと。某其內より數葉を撰み。直に走つて。蜀山翁を見て乞ふ所あり。翁これを許す。逸助思はざるに數金を得つ。其殘餘の故紙をとつて敗壁を補修す。忽ちにして數人あり。來つて逸助に迫るに其故紙を分たん事を以てす。逸助曰く遲し。僕既に破壁

を修理してこれをつくせり。又分つべきなしと。數人これを肯んせず各々數金を出し。既に壁上に粘付する處の故紙を剝ぎ爭ひ獲て辭してかへる。逸助利する處數十貫に至る。如斯時々彼は蜀山翁の補助を仰ぐにかゝはらず。何事を爲し何商賣を營むといへども。悉く失敗に失敗を重ねぬ。時盂蘭盆に會す。逸助畢生の智を運らして百餘の紙燈を造り。これを市に售る。慮らく頃刻にして其利莫大なるべしと。去れど買ふ者なし。彼が計畫は畫餅に歸し去らんとせり。これ彼の細工の他の紙燈に比して。餘りに不恰好に無造作なりしが故なり。彼は殘餘……寧ろ全數の紙燈を擔ふて。蜀山翁が門に至り。これを售らん事を求む。翁笑つて曰く。今紙燈百餘購ふといへども又用ゆべきの途なし。汝宜速に去つてこれを市に鬻ぐべし。と逸助聞かず。強て翁に迫るに悉く買はん事を

以てす。翁甚だこれを苦しむ。忽ち一策を案じ。逸助が携ひ來る所の紙燈をとり。筆にまかせてこれに詩歌を書し。百餘忽にして書し終り。別に一文を草し。これを逸助に與へて曰く。汝紙燈と共に此趣文を持し。余が知人の家を訪へ。と逸助其命の如くす。知己朋友門人の輩爭つてこれを求め。通常紙燈七八錢に過ずといへども。翁の書あるを以つて人皆價を倍し。或は三倍四倍しつゝ百餘悉く盡く。と

其他蜀山が言行に就ては記すべき事多し。去れど蜀山は徒に諧謔自ら喜ぶの人にあらず。彼は濃厚なる人情を有せり。故に彼は父母にも弟妹にも朋友知人にも。且つ彼が盡くすべき義理人情を缺きたる事なし。彼が師たりし松崎觀海死するや彼は父母を失ひたるが如く悲み歎きたりき。其先生を祭るの文に曰く。

維安永九年庚子冬十二月二十三日。門人太田覃。謹以清酌庶羞。祭故龜山大夫觀海松崎先生之靈。梁木一壞。不見泰山。觀海一涸。不歸黄泉。昔侍函丈。今仰蒼天。俯而思之。于茲六年。旣愁家廬。又歎逝川。酌茲行潦。庶羞在筵。尙饗。

と彼は又其母杉田氏の墓碑に涙を以て刻せる文字あり。讀來つて孝情人を動すものあり。

(前略)嗚呼哀哉。白山律々。旻天蒼々。顧思樹靜風止之時。不可得(云々)

又彼が京師の和學者上田秋成を世に紹介せる。尾張二老傳を草して横井世有堀田大林が名を後世に傳へたる。翁が愛妾賤子を失ひて悼惜せる。一として彼が尤もシンパシー(同情)に富みたるの證左にあらざるなし。今賤子に手向けし詩歌を掲ぐ。

しつやしつ賤の苧環はてしなく
　なと物思ふ夏の日ぐらし

ふねの中波の上なるうき草の
　やどりもいつかことせ七とせ

くりかへす暦の數もはたまきに
　あまるばかりの手向とぞある

にごり江のみかさまさりてすむ人の
　門邊もむかしわかずなりにき

ちかひてしはなもならへす松の葉の
　えたもかはさず年をふる塚

甘露門前暑欲燃。覺雲山上月辭圓。床頭一部西廂記。殘夢醒來二十年。

杏花園

前書に晴雲妙因信女の忌日なれば云々（水無月十九日）しぶくにちの五文を上ゝ置て云々とあり。又彼は常に雅友の貧困に陥れるものを救ふと一二にあらず。燕斜翁（又號豆三）といへる人が産を傾けて殆んど窮せる由をきゝて。彼は自ら奉賀帳に序し。四方の雅客に應分の助力をなさしめたるの文あり。

燕斜が別業に題せし日は。嚢中自らまん〳〵たりしが。豆三暮四のいとなみも。引込紫衣の隱居となりては。澁團扇をば打すてゝ。柿の衣の奉加せよと。さる大擅那のすゝめにまかせ。鬼の念佛の大津繪の。萬人講の催に。心もいとゞせりなづな。五行たびらで佛の座。臺座後光も煤びたる。すゞなすゞしろ箔しろの建立。思へば春の一籠の。土一升に金一升とつかへ兵衛の冥加錢は。御心持次第秋の七草。一葉づゝ御志をまつの葉の。ちりもつもれ

ば山〳〵有がたく奉存候己上

時も時盆の十二日蜀山人席主にかはりて書すとあり。

此奉賀帳には猶喜三二（手柄岡持）の跋あり。『岡持家集我れもしろに』曰く。

唐衣きよく清らなる表紙をひらけば。蜀山人筆を揮て其初に物す。こはいと面白きふみならんと。ひとひら開けばれもふにたがひて奉賀帳じやか草子加帳か。夢かとばかり行すぎの。丸太橋のまどかなる。光を初筆につきの秋。三五夜中の深切あ。色にあるてふ床花の。桂の花のちりつもつて。山の端てらすいざよひの。つきてもれはき黄金づくりのたち待居待今の間に。二千里の外仁恵の。心〳〵につきのよな〳〵。果報は寝待のつきせぬ祝ひ。はつかにあらぬ鼠衣の。奉加も時にある鼠。ひかれてうれしき弓張月。お

かげを燕斜が大中り。ふうきといふも草の名にて。奉加といふも
冥加の至。いたりやいたり。やんや〱。
時は葉月廿八日此帳面の尻ッたくり

呉陽山人手柄岡持識

とあり流石は喜三二なり。其文雅にして意面白く。自由自在の轉語法。翁とは又一種異なる妙趣あり。

程なくして燕斜翁の死するや。彼は翁が富貴の家に生れながら。其富貴を保つと能はずして。其晩年に至り窮阨に陷れるを見て。殊に其死をいたみ。奮つて自ら施主となり。以て其靈を慰せりといふ。

燕斜が別業に題すと戯れしも三十年餘。しのばずの池のふるき昔にて。みよ菊の盃をくみて。管を巻物くりかへせしも。七百とせすぎぬらん。ことしむつきのはじめ。朝の雲のかへり足にさりや

まひをとき。彌生のつでもり何がしの國のまとゐに。ふかみ草の花みしを。此世のかぎりとして。さつきの末に身まかりぬときくにも。むねつとふたがりで。とみにゆきとふらふ事能はず。年毎の春のはじめに。手づから七草を植て送れる事など思出づるに。なゝくさ薺目わたる鳥の。すみやかなるが如し。

春毎に君がれくれる佛の座
かへすやもとの五行たびらで
せりなづな罪も報もなき身には
さぞ後の世のすゝなすゞしろ

彼は豪俠なる江戸ッ子肌を愛し。常に自らもつとめて其粹を學びたるなり。否彼は江戸ッ子として立派なる江戸ッ子たりしなり。去れど五月の鯉を以て評すべき江戸ッ子にはあらざりしのみ。

大工清吉は難波町にすめり。薬研堀邊に請負たる家の上棟の日。梁の上より踏はづして大地へ落ちたり。人々驚きさわぎて。いろぎ引れてこし見れば。隣家の庭の塀の上ある忍がへしといふもの折れて。右の脇より左の腹まで突つらぬきて有けれども。清吉少しもひるみし氣色なく。其まゝ人の肩にかゝりて。急ぎ我家へ立歸りて。すぐに酒一升と鮪のさし身を取よせ。これをのみ食ひす。家内の者をはじめ人々もとゞむれど。聞いれず。今より療治にかゝりては。毒いみにて何もくふ事叶はざれば。日頃すきなるものをくひて療治をうけんとて。又蕎麥をとりてこれをも心よくうちくひて。いざとてかのつらぬきし忍がへしの竹をひきぬかせ。是より内外の醫療をうけて。日ならずしてつひに平癒して。以前の如く日々家職をなしたり。此後十四五年も經て。傷寒を病ひて終

れり。さばかり豪傑なれども。病には勝ことあたはず。實業のかれ難き事なるべし。(これ首に蜀山か江戸仁俠豪邁風を慕へるの證左として掲ぐるのみ)これ彼が江戸ッ子氣質の一として賞揚せる所の一なり。又彼れ且つて歌妓小万と呼べるもの。其容貌の美にして其藝又秀でたりけるが。何故ともなく纏頭する客少くして。氣の毒ありと告ぐる人ありければ。蜀山は或日小万を山谷の八百膳に招ぎ。これを見てこれと語るに。其噂に違はざりければ俠氣自ら禁ずる事能はず。即座に筆をとつて

詩は詩佛書は米庵に狂歌たれ
　藝者に小万料理八百膳

と書してこれに與ふ。然るに當時の遊客これを聞傳へて。小万を其席に招ぐもの多く。小万は爲に非常なる幸福を得たりといふ。

次に蜀山が狂歌によつて奇禍を得たりし話あり

せいしつといへども知れぬ紙合羽
　油斷のならぬ天が下かも

これ御番に出づるの途次雨に逢ふて合羽に雨のしみて。衣服のいと濡ひたればとてつくれる狂歌なり。時に將軍家治馬より落ちて病を得。閣老田沼意次藥をすゝむ。忽にして家治薨ず。世或は意次を疑ふものあり。人心恟々たるの折柄なれば。蜀山の此一首以て上を誹謗するの罪に坐し。御咎を蒙るに至る。次で翌々年天明八年白川樂翁政に預り大に人才を登用するの機に會し。世れ悉く文武の二字を口にせり。蜀山これを見聞し

世の中にかほどうるさきものはなし
　ぶんぶ〳〵と夜もねられず

此吟又有司の間に傳はり。其責問をうくるに至れり。去れど辨疏其

宜を得て事なきを得たりしといふ。時年四十歲

蜀山常に兀たり。阿房の才を抱ひて以て世を弄ぶ。彼が眼界は洋々たりしなり。王公の尊を憚らず。妓婦乞食の賤を侮らず。山河草木國土人情政治宗敎。彼に觸るゝ所のすべては。彼が狂吟となり來るなり。恰も化石谷に入つて。非情有情萬物悉く化石するが如し。彼は猶この災厄の爲に狂吟を廢せざりき。彼は世のあらゆるものを咀嚼し。あらゆるものを捕ひ來つて。能くこれを利用しつゝ。遂に一世を風靡して。『狂歌たれ』と自らゆるすの有樣を見るに至れり。

◉蜀山が交遊

彼が才名の世に喧傳せらるゝや。學者たり。狂言作者たり。俳諧師たり。士たり。商たり。農たり。常に彼が四邊に圍繞して以て彼が

一顧を喜ぶに至る。彼は交遊に於て清濁さらに撰ぶ處なかりき。彼は一塊土壤をゆづらず。以て泰山の高きをなし。彼は一縷の細流を撰ばず。以て黃河の大を保ちき。去れど次第〳〵に集る處の交友。——寧ろ自ら交友と稱しつゝ世に誇るの輩。雲の如く蝟の如く其門に群がるに至りては。彼も殆んど洒々たる能はざるに及べるなり。今其彼が交遊に於ける有樣を盡さんは。尤も至難に屬すといへども先づ其一半を玆に揭げ。以て如何に彼が友人に對せるか。又友人の如何に彼を見たりしかを學ばんとす。

彼が壯年時代に於て同學の故を以て最も親交ありしは。前說する如く牛門の四友と稱したる岡部素親。大森華山。菊地醫盧の三士たるが如し。其他に至りては十返舍一九あり。山東庵京傳あり。曲亭馬琴あり。石川雅望あり。畠中銅脉あり。北川眞顏あり。烏亭焉馬あ

り。小島橘州あり。平賀鳩溪あり。加茂季鷹あり。手柄の岡持あり。加藤千蔭あり。山本北山の如き。古賀精里の如き。朱樂菅江の如き。耆山和尚の如き。畵家酒井抱一の如き。北馬の如き。烏文齋榮之の如き。俳優市川三升の如き。瀬川路考の如き。俳人大島蓼太の如き。木室卯雲の如き。今一々これを屈指するに暇あらず。

彼れ大島蓼太に關して記して曰く。（奴凧）明和九年壬辰二月廿九日の大火の時。通鹽町（假名世說に橫山町とあり）に大島蓼太といへる俳諧宗匠あり。（稱雪中庵）火さかんになりし時。文台に草稿をのせ。藥罐に白湯を入れて心靜に立のき。深川六間堀要津寺の庵にゆきて。文台を直しれき發句をして火の爲に問來る人をとゞめて。一夜に百をみてしといふ。今はかばかりの宗匠もありやなしや。其發句（火事の折の句なり）

緋櫻をわすれて青き柳かな　蓼　太

予が牛込にありし時。此蓼太。清水の藩の谷田貝傳次といへるものを介として。酒一陶をたづさへ來りて

高き名のひゞきは四方にわき出て
　赤良〳〵と子供までしる

といへる狂歌を添え持來れり。其後深川要津寺に。毎月蓮花會といへる會ありしが。招かれてゆきしに。一席皆禁酒なれども。密に蓮社の禁をゆるして。酒などすゝめたりき。

蓋し四方の赤良は蜀山が別號たりしなり。彼の門弟文寶亭は蜀山の友にして畫家たる田阿子の事を假名世説にあげたり。蓼太の話に相似たり。

田阿子(牛込二十騎町に住めり)は土佐の畫風を好みて。しかもよ

くせり。窓のおもむき甚だ古雅にして。尤風韻あり。性寛悠にして。人と爭ふ事なし。此は寛政乙卯の春。正月十日。牛込柳町より火出で西北風烈しく。飯田町邊も風筋あしゝとて。諸道具もみな土藏にはこび入れて。やすき心もなきに表の方へ六尺ばかりなる大横物の掛幅を背負來れるものを見れば田阿子なり。では如何いづこへ行給ふぞと問へければ。我家の近き邊より火出たれば。取るものも取あへず。やう〳〵此一軸のみ持出しが。今人々にとへば。早や我家もやけたらんと覺ゆ。さきのほどより走りあるきたれば。空腹になりたり。何にても少し給はらんと申されしゆゑ。疊もなき處に。わづかに敷物まうけて。有合の調度をしきやう(折式様か)の物取集め。飯を出したれば心よく食されて。扨此一軸は探幽が書きたる鷹也。いかにも世に難有ものにて。其筆意ふと

にすぐれたれば。火にやかん事のおしくて。是ばかりは持出たり。これ見よとてひらきて見せられたり。われもとより書は好めども。かゝる騷がしき折なれば。目もとゞまらず。折しも又火も廣くなりたり。風もつのりたりなど人々の立騷ぐに。猶も心落付かざれど。こゝを見よ鷹の眼中よくかきたり。かしこの羽の毛かき見事なり。などいはれつれど。耳によくも入らず。とかくする程に火もやゝすこししづまりぬ。と聞えたれば。田阿子は禮をのべてかへられぬ。かくさわがしき中といひ。家もやけたらんと思ひつゝ。驚きたる躰もなく。書をほめられしは。彼の佛書師良秀がたぐひなるべし。

と彼が友として蓼太を推し。猶玆に文寶亭の筆をかりて田阿子を傳ふ。彼が私淑する處以て見るべし。彼が友に自墜落先生と稱する人あり。

自墜落先生（山俊明字桓號不量軒又北華）又庵を無思庵と號し。齋を捨樂齋とし。坊を確蓮坊とす。（養福寺の碑文取意）元文四年己未歲十二月晦日。年四十にして戲に柩をつくり。自ら其柩にのり。同好の諸子これを送りて。谷中新堀村補陀山養福寺にいたりて。葬儀をなす。住僧下火の文を唱ふる時に至りて。自ら棺を破りて躍り出しに。葬にしたがふ諸子酒肴を携へてうたひつ舞ひつ。たのしみて。人の耳目を驚かせりとぞ。さて養福寺の堂の前に。しだれ櫻一もとを極て。碑を建自ら狂文を書て後の北華書と題して世外の人の思をなせり。

蜀山又其親友たりし耆山和尚に就て記して曰く。

青山にいませし耆山和尚は。南廓先生の門人なり。青山百人町の

束の地をかりて。すむ事三十年。妙有廣といふ。萬翠一窩といへる扁額をかゝぐ。屏風に張置たる先生（南郭）の書翰あり。『今日妻子ども召連開帳案内に罷出候處御留守を不顧大勢押込どろ坊同前の仕合御免可被下候』とあり。云々（又曰く）耆山和尚十二にして縁山に入り。二十八にて竪義部頭をつとめ。三十二にして母を携て青山百人町にかくる。其時の歌とて。

百が味噌二百が薪二朱が米
一歩自慢の年の暮かな

くはしくは小口泉谷寺惠頓和尚の衣鉢堂の文に見えたり。塔は目黒祐天寺にあり。文は泉谷瓦礫集にのせたり。其耆山和尚と親交ありしの證として。左の詩を見るべし。

同諸子集耆山老公房得冷字

久在㆓塵網中㆒。心神不㆑能㆑靜。幸田㆑紆㆓勝引㆒。重得㆑遊㆓幽境㆒。點綴雨後雲。熹微空中景。餘清入㆓晴軒㆒。宿陰凝㆓翠嶺㆒。身忘㆓纓紱牽㆒、。坐愛繩林冷。吾師一揮㆑塵。迷心頓可㆑省。談論淵且玄。欲㆑汲塹㆓短綆㆒。

歳抄與關叔成山士訓森周夫井伯秀子厚集
耆山上人山房得一東韵

滔々江漢流向㆑東。悠々去無㆑窮。風塵爲吏驚㆓歳晩㆒。劇思晋代諸名公。東林結㆑社十餘歳。歳々賞遊幾囘同。柴門朝叩青山外。塵尾閑揮白社中。蓮漏頻移催㆓短景㆒。梅花欲㆑笑待㆓春風㆒。臘酒三杯纔犯㆑禁。醉顏己映㆓夕陽㆒紅。到來一絕風雲思。不㆑管人間窮與通。

壽耆山上人七十

此生苟悟㆓無生理㆒。將㆘歸㆓釋部㆒談㆗空々㆖。

綠嶽曾推第一名。早辭㆓官寺㆒謝㆓浮榮㆒。同思白足三千坐。獨抱㆓明珠㆒十五城。欲㆘向㆓空門㆒稱㆗上壽㆖。咲曰人生本無生。吾曹幸得㆓忘年愛㆒。長此青山結㆓社盟㆒。

夏日寄耆山上人

青天落々兩三松。影入㆓山窓㆒積翠重。別有㆓夏雲朝暮變㆒。日裁㆓佳句㆒鬪㆓奇峯㆒。

此他詩集に載するもの一二にしてたらず

蜀山が市川三升(團十郎)と交際ありしは。左の一文にても明なるが如し。(俗耳鼓吹)

市川三升(五代目)狂歌を好む。名を花道のつらねといふ。未のとし十月晦日。曹司谷へまうでたりとて。歸路に立寄り。暫といへる大字を書き。かたへに

ひまがさいごかんねん佛といふうちに
しばらくありて立かへる春

と書したり。

又市村羽左衞門などゝも其門に出入せるにや。同書に

天明四年辰年十一月顏見世ふきや町市村羽左衞門座。やぐら幕をれろし。桐長桐座にかしてより。今年(天明八年)申年まで五年なり。市村(當代)羽左衞門(龜藏)より到來書

(天明五年己十月十七日家督相續羽左衞門となる)

今日御番所樣御内寄合に被召出。羽左衞門芝居再興被仰付。難有仕合奉存候。興行之儀者。來る霜月朔日より。顏見世興行仕候樣に是亦被仰付候。右爲御知申上度如此御座候以上

申五月十八日

市村 羽左衞門

菊屋善兵衛
同　茂兵衛

又蜀山と平賀風來山人(源内名國倫字士彝號鳩溪)との交際について
は。近世物之本江戸作者部類卷之二讀本作者部中に

南畑子(蜀山人)は壯年の時鳩溪と友としてよし。明和安永の間投
扇興流行の折などは。しば〱面會せしよし。西原梭江に與ふる
手簡に見えたり云々

とあり。かゝる關係よりして風來山人が飛花落葉に筆をとりて。蜀
山其序をなして曰く

春の朝中の町にちる花を見て。山谷豆腐の雪かとうたがひ。秋の
夕正燈寺の落葉を分けて。淺茅が原の露をおはれむ。こゝにをて
かの風來山人。一文紙鳶の糸切れしより。かきれかれたる狂言綺
語。讃佛ならぬ六部集など。すでに書林の櫻木にはひて。茶屋
にことはる紙花の如し。たゞ相對の紙花は。風前の塵とひとしく。
根なし草の根にかへらず。廊下座敷の箒木にはかれて。終に砂利
場のすきかへしとならん。とをかなしみて。千早振かみ屑をくれ
竹の。よくひろひあつめ。近からんものは目にも見なんし。遠か
んものは音に聞く耳搔。寮の腰張の張交とはなしぬ。

てんつる天明みすぢの糸の長き春の日

四方山人誌

猶これには嘉三二(手柄の岡持)朱良菅江平秩東作等の序文あり。

四方山人こゝに故人何がしが遺草を集めて專ら世に售ひろげんと
す云々

の管江が序文によれば。これ風來死後蜀山自ら奮つて其遺稿を公に

したるや知るべし。東作も又

（前略）風來子も亦吾黨一人の世話燒なりしが今は此土の世話にあきて無何有の鄕の講頭とやなられけんその書捨もなつかしとて四方山人の世話によりて此小冊とはなりけらし　へづゝ東作書

又蜀山は『平賀鳩溪實記』に追加して曰く

予が平賀源内に逢ひしは。明和四年丁亥の秋なり。（蜀山十九歲の時也）四谷新宿煙草屋稻毛屋金左衛門（平秩東作）は内山淳時先生（賀邸）の門人にして。知る人なり。内藤新宿へ尋ね行て。南條山人（名は孟鄲字仲祜房州人）川名林助といふ人にあひし時。徂徠の眞蹟一幅。古今詩刪を贈りし事あり。林助高野山へ出立すときゝし故右林助へ暇乞に行しなり。此時林助平賀源内方に寓居と聞て。神田白壁町へ尋行て。源内にも初めて逢ひ。夫より屢々相見しなり。寢惚先生文集を草稿持參して。悉くは讀み得ず。水掛論を讀みて聞せしかば大に稱歎せしなり。予も兼て源内が作の。根無草志貪軒傳を讀みて面白く思ひ。　云々

とあり又同書に

或時源内申しけるは世上の學問以の外に薄く成て。國字解など世に流布し云々。又寢惚先生と狂名せし者あり彼は將軍家御徒にして。大田直次郞といへるものなり。才智あるものと見えて。狂詩狂歌狂文に名あり。彼を吾術中に入れて倶に事を謀るべしと。食客の者を媒介として念比に出合けり。

これ決して鳩溪の言にはあらざるべし。假令此言をして鳩溪の言なりとするも。蜀山は決して彼が爲にマザ〳〵と術中に陷り。勝手自儘に利用せらるゝ人物にあらず。鳩溪にして蜀山を利用すると一寸

ならば。其間に蜀山は確に彼を五六寸も利用したるべし。實際に於て鳩溪蜀山が才を愛し。蜀山も亦長者として。先輩として鳩溪を推したるなり。決して其交情に於て最初より。權謀術數の爲にせる等の事無きや燎々たり。其沒後蜀山が彼の遺稿を公にせるが如き。必ずや生前の交情に於ても春風油々たる感ありしに相違なしと斷ずるを得べし。故に蜀山は啻飛花落葉に於てのみならず。假名世説其他の著書に於て。常に彼を慕ひ。彼が文に服せるの語あるを見る。假名世説言語の條に曰く

風來山人芝居の事を書ける文の中に

茶屋の混雜勝手の騷ぎ。下女飛んで八百屋にいたり。魚ながしに躍る。かまどに陽炎もえ出づれば。擂鉢地下に雷を發し。庖丁の電光あれば。いり鳥鍋に時雨の聲あり。四季のけしき目前にあらはれ。はからずして仙境に入るかと疑ふ

として其些々たる文句を迄で。世には傳へんとす。ヨシ鳩溪に於て野心ありたりとせよ。蜀山は常に淡き事水の如く。宏きこと大海の如し。洒々落々として彼に一點の邪氣あるなし。光風霽月を以てこれをいふべし。彼が目に映ずる所眞如無差別。敵あるなく味方あるなし。風來山人につきては記すべき事優に一部をなすに餘ある程なれども。今唯其要を拔萃せるのみ。

彼が又常に同門の故を以て親交ありし。平秩東作とは如何なる人ぞ。今少しく玆にいはん

平秩東作は戲號たり。本名を立石金右衞門懷之といひ。字は子玉と號して東蒙或は嘉穗とも稱したりき。尾有の藩士にして。伊東蘭嵎に從つて學び。又內山賀邸の門に遊べり。蜀山との交際は此時に於

て結ばれたるなりき。後私塾をひらき。子弟を教授して自ら給したりしも。何故か彼の學風世に容れられず。彼は居常爲に快々として樂まず。其屢々火災よかゝり。以て其財を傾くるに至りて。彼は斷然武士の魂なる兩刀を投出して。商賈の仲間に一身を投ぜり。煙を鬻ぎて屋號を稻毛屋と稱し。店を四谷新宿に搆えぬ。去れど彼は商賈として尋常平凡の商賈たる能はず。彼が不平は常に其胸間に鬱勃たり。鬱勃たるもの終に其噴火すべき火口を求む。求めてこれを得たり。狂歌乃ちこれなり。彼は狂歌に因つて其不平を慰し。以つて一世を愚弄したるなり。去れど狂歌の才に於ては到底蜀山以下たるを免るゝ能はざりき。去れど蜀山は彼を以て一の畏友とし尤も親密に交際せり。其言語に關して記して曰く。

東作云二本さしたる人と見ば。隨分いんぎんに敬ふて。假にも無

禮なすべからず。町人の無禮德のゆく事ひとつもなし。にくいやつとて切倒されずば。おまいやつとて借りたふさるべし。いづれにも怪我のもとなり

これ當時士風の癈頽して。庶民を苦しむるの甚しきを憤れる言語にあらずや。彼が此等鼠輩と伍を同じふするを耻ぢて。超然平民として世に立てるの意以て明なるを得べし。不德不義至らざる處なけれども。町人としてはこれに抗抵反撃するは。却つて笑を招ぐの基たり加かず。彼をして不得たらしめよ。彼をして不義たらしめよ、吾れは唯敬してこれを遠ざけんのみ。とこれ彼が一の人世觀たり。又同書に

平秩東作云ふ。自慢も味噌といひ。りん氣も燒餅と下げすみて。いさよひはけんどんの銘になれば。戀も貧こゞりの事に聞なしぬ。

れしつけ口口の前裁にざつま芋作らるゝなるべし。

これ世態の日にまし花より團子主義に傾き。人情なく徳義なく。次第〳〵に卑く。醜く。低く。汚くなりゆくを慨せるの語なりといふべし。

斯くして寛政元年三月八日六十四歳にして東作は歿しぬ。猶其親交ありしものにして傳ふべきもの少からず。烏亭焉馬あり（山崎助次郎といふ）初は松春堂永年ともいひ又蓬萊山人歸橋と號す。戯作多し。朱良菅江あり。（次章に説くべし）山東庵京傳あり。曲亭馬琴あり。古賀精里あり。山本北山あり。畠中銅脉。石川雅望。加茂季鷹の如き。手柄岡持の如き。加藤千蔭の如き。詳説するの面白味は充分なるべきも。今玆にこれを略して。蜀山が狂歌及狂詩の問題に移らん。

終に臨んで吾人の記憶すべき一事は。彼が交れる處の人物の雜多なる事と。雜多なる人物に各自特殊の風韻あり。若しくは氣骨ありしの一事たり。彼が盛名赫々たりし時に在つては。實に彼が友人として過せるものよりも。幾百倍の自稱友人ありしや知るべからず。當時文人墨客として。或は其臭味あるものとして。蜀山を知らざるを以て無上の耻とせり。故に一首の狂歌を乞ひ得て。吾れ彼を知れりと吹聽し。彼が一扇面の書（實は文寶亭の代筆多し）を得て鬼の首をとりたるが如く人に誇り。蜀山と親交あるが如くもてなすもの。實に無慮と稱すべきの多數なりけるなり。恐くは古今文士として。蜀山程多くの友を有せるものあらざりしなるべし。彼は己を空ふし淡々水の如く。方圓の器に應じて。敢て其敬をつくらざりき。多少これありしとするも。先づ彼は交際子の技

量に富み。多くの人を好遇し。多くの人に好遇せられたりしや疑なし。

◉蜀山の狂歌狂詩及狂文

蜀山の狂歌狂詩狂文に於ける才藻は。實にこれ天賦のものにして。學びて及ぶべきにはあらざりき。世人やゝもすれば狂歌狂詩の類を排して。野卑賤陋見るに堪えずとなせども。狂歌決して野卑なるに在らず。狂詩必ずしも賤陋なるに在らず。唯狂歌師と稱し。狂詩家と稱するの徒。多くは無學短才の輩にして。一の見識なく。一の主張なく。只管淫猥荒蕩の言をなし。以て俗に媚び。點料と稱し入花と號し。金錢を貪るのみか。遊客に從つて其酒席に侍し。幇間的の破廉恥なる所業をなすものさへ多かりしかば。遂に世の誹難をも受

くるに至れるなりといへども。これ決して狂歌其者の罪にあらず。狂詩何ぞ惡むべけんや。

和歌に於ける萬葉の如き古今の如き。これ其時代に於ける狂歌也。吾人は和歌と稱し狂歌と稱するの差別あるを知らず。其時代を歌ふ者。宜しく其時代の言語風俗を以てすべし。見よ今日和歌の羈束の甚だしくして。以て滔々たる文明の進歩に伴ふと能はず。世は新熟語を要すと唱へ。新調を用ゆべしと叫ぶにかゝはらず。彼等は停車場。プラトホーム。電信。鐵道。輕氣球。ピストル。麵包。肉汁。帽子。石盤。洋燈。時計。寒暖計。其他總て今日世上に尤も多く要せられ。尤多く用ゐらるゝ處のもの。一として狂歌として歌ふべき適切なる用語あるなし。電信をはりかねのたよりとし。鐵道を以てくろかねのみちとす。何ぞ其用語の拙劣にして聞ぐるしきや。今一層世運の

繁雜に趣き來るの日に至つては。狂歌は遂に時代を歌ふべき能なきに至らん。若し果して新熟語を作り。新調を用ゐて。其弊をさけんとせば。勢ひ狂歌と一致せざる可らず。和歌は狂歌に一致せざる可らず。狂歌は同時に非常なる隆盛を見るに至らん。和歌によつて時代を歌ひ得るの説を主張するの人あらば。試に左の狂歌を以て和歌となせ

世はひらけ電信電話滊車滊船
實に盛なる輕氣球かな

これ試に拙作をかゝげしもの。狂歌として敢て價値あるには非ざれども。以てよく和歌に變じ得べきか。否々到底なし得べき道あるなし。故に曰く和歌は時代の聲なり。時代の聲にあらずして。如何ぞよく其時代を歌ふべけんやと。唯在來の和歌に吾人は滿足せよといはず。和歌悉く排却せよといはず

蜀山は和歌の到底復雜なる世態人情風俗を歌ふに適せざるを知りて。以て狂歌に志を傾けたりしが。そは今敢て論ずべきに非ず。唯彼が歌ふ處氣韻自ら脫俗の風ありて。往々和歌以上の秀句をなすを見る。

十三夜雨ふりければ

十三夜雨はふりきぬ里いもの
きぬかつぎてぞふすべかりけり

九月盡

紅葉ちる菊やすゝきの本舞臺
まづ今日はこれぎりの秋

案山子

心なき弓矢に心ある鳥を
　いかゞしてかや驚かすらん

此案山子の歌の如きは。和歌として見るも決して拙劣のものにあらず。『いかゞして』の文字に因つて。案山子をきかせたる働の如き。實に其腕前のある所たり。

露

春がすみ立くたびれて武藏野の
　はら一ぱいにのばす日のあし

流鏑馬

梅の花しらしげ藤にやぶさめの
　やぶうぐひすもれるあやゐ笠

春

しら雪の上野の花をみてしより
　けふもあすかに日ぐらしの里

小野の瀧の繪に

山さらにかすかにひびく小野の瀧
　木曾の伐木丁々として

これ代木丁々山更幽の句を用ゐたるもの、何ぞろの用語艶麗にして雅致なるや。

首尾の松に月出で船ある書に

あげしほに月のかつらの棹さして
　さてよい首尾の松をみるかな

氷梅のかたある衣きたる女の繪に

手折るべきちぎりはうすき氷梅

ふみのとりやり香に匂ひども

龜井戸の藤

本院のおとゞの氏のふぢの花
おと菅原の廣前にさく

本院のおとゞは藤原の時平朝臣をいひたるなり

天神の開帳に天國の太刀ありときゝて
見にゆきしに雨にあふ

天國の太刀のしるしをみせんとや
一ふりふつてはるゝ夕だち

『一ふり』にて一振をきかせ。『夕立』に太刀をこめたり。狂歌の句法面白し。

茄子の書に

はつゆめにみてさへよしと夕まぐれ
たがかねでとのかねつけてまつ

紺屋町一丸の屏風に職人盡の繪あり

疊刺の門にたがかけあり

水桶の月やたがやにさし疊
近江表とみゆるさゞなみ

誰家に桶のたがを用ゐ來り。月の光より疊をさすなどゝ轉じ。疊表をさゞ波に見立てたる。詩韻自ら滾々たるを見る。

研師

三尺のつるぎをとぎて四百年
さびの出ざる代々もこそあれ

治に居て亂を忘れず國家長久の意見るべし

塗師

いかばかりうるしぬるでの紅葉ばや
山のひらでも谷のくぼでも

具足師

太平のみよにうまれてむし干の
かざりの具足おどす目出度さ

文月十八　唐衣橘洲大人十三回忌に

むかし見し人はもぬけの唐衣
きつ十三のとしやたちけん

葉月四日本所回向院に筑波山蠶養權現の開帳にまかりしに
きのふ四日に事終れりと聞くも本意なし。

開帳のかひこの神をきて見れば
きのふの夢となりし蝶々

加賀の國にすめる越川氏の家に藏める龍尾石の硯はいさごの
こりかたまりておのづからあやある石の形をなせるを人のた
くみをそへて硯とはなせるなりけりこれにざれうたよみてよ
とのもとめいなみがたくいさゝかおろちの足を書そふるもの
ならし

龍の尾のすゞりにむかひあま雲の
墨すりながし筆うるほさん

手柄岡持追悼

長いきを手柄にしたる岡持も
いつか木魚となりにけるかな

居風呂の形したる爛風呂に書つけゝる

嘉肴冷酒燗無レ極

此ちろり外へはやらじ湯加減も
あるじの側に居風呂の燗

早春

萬年のつゞみにつれてうぐひすも
ほうと初音をうち出すらん

女三宮

柏木のかし榑でひぐすかさきは
女三の糸にから猫の皮

根岸の抱一隠君をたづねしかへるさに鞘町の雪のやの花の會

にれもむくとて
やくろくの鶺つまりし錫本の
根岸から來てはまる鞘町

酒井抱一名は忠因徳川氏の臣酒井雅樂頭宗雅の弟幼名榮八多病の故を以て西本願寺文如上人の養子となり文詮暉眞といふ等覺院權大僧都に任ぜらる後職を捨て東都にかへり根岸鶯村に住し風流三昧に世を送る蜀山と親交ありしなり

梅

同勢の桃も櫻もつゞくべし
一番やりの梅のさきがけ

定家卿月を見る書に

十五夜にかたふく月のうたよめば
曉のかねごん中納言

青樓四季のうたの中に

春

玉くしげ箱提灯のふたりづれ
花の中ゆく花の全盛

夏

みじか夜を比翼むしろの天鵞絨の
毛のたつまなくぬるよしもかなら

秋

玳瑁のくしひかりやぴいどろを
さかさにつるす燈籠の鬂

冬

やう〳〵と來てむぐりてむ冷さは
君がこゝろと鼻と兩足

飮中八仙

知章

井戸ばたの茶碗酒にて馬の耳
風吹送る猪の牙のふね

沙陽

酒の香のにほひくるまの麴町
十三町やよだれたらさん

左相

聖人のたのしみ酒もはかりなく
日には十貫文のいり用

宗之

盃のひかりもさすが男へし

くねりまはらず皎として立つ

蘇晉

さけを飲む長齋坊主めでたしと
布袋一幅床にかけもの

李白

勅諚といつても一斗詩百篇
百ぺんよべと白川夜船

張旭

柳髪すゞりの池にひたしつゝ
むかふ旭のからす羽の文字

焦遂

五斗〳〵とやもるどもりも錢でまの

はだしでにげる管をまき舌

近江八景

粟津晴嵐

いそとせの夢も粟津の粟のめし
かしぐ間もなく晴るゝ夜嵐

勢田夕照

蜈蚣より夕日のあしの長ければ
大はし小はし渡る唐橋

三井晩鐘

三井寺の鐘ひきおげし辨慶が
力も今は寂滅爲樂

唐崎夜雨

異晝の日本晴の天氣より
雨の夜ゆかし唐崎の松
矢橋歸帆
はらむ帆のかへる矢橋のはやめにて
あんじるよりもやすき水海
石山秋月
うすぐらき石山寺の源氏の間
さし入る秋の湖月一卷
堅田落雁
松風（菓子）をかぢる音かとよくきけば
かたへのかたゝならぶ落雁
比良暮雪

山もりのひらの淡雪ゆふ豆腐
うりくる頃やつぼと詠ん
鴻の池の爲にかれが書きて與へしといふものあり。又白木屋の爲に
よみたるもあり。蜀山の盛名は實に天下を動かせるなり。今鴻の池
の爲に書きて與へしといふは

世の中の
定
小判六十目の
桐の葉あくる月の光次
錢時の相場は
上り下りにて青海波の
しほのさし

にた山の多き世の中

時がしは不仕さ書て候

月　日

其他蜀山の名歌屈指するに堪えず。今試に右にかゝぐる處のものをとつて是を論ずるに。古今獨歩と稱せらるゝ蜀山の吟として。未だ全く首肯すべからざるもの無きにしもあらざれど。彼の徒に無常を歌ひ。厭世を歌ひ。淋しさを歌ひ。悲しさをのみつとめて歌はんとせる和歌に比して。吾人は實に狂歌の社會的あるを見る。和歌は僧侶的なり貴族的なり。社會の實相を歌ふに短にして。空想もしくは妄想をかるの材となれり。よろしく速に和歌と狂歌とを調和せよ。これ明治に於ける新調の歌体たるを得ん。俳壇既に動けり。新派の不手際なる無頓着あるものすら。今や滔々舊派を壓するの色あ

り。和歌に於ける兒戯も亦かくの如くして來らん。俳壇の新派は狂句にやゝ近邇せる處あり。これ勢和歌と狂歌の調和を要すべき前兆にあらずや。讀者乞ふ余が言を記して。自然か後日諸子に呈する處の現象を注視せよ。

蜀山既に見る處あり。彼が著書。『濱のまさご』と稱する一小冊子を繙ける人は。狂歌を詠せんには。常に和歌の心を失ふ可らず。狂歌とても和歌の心をすてゝ。無氣に賤しく鄙びたる事をのみ作らんとにはあらず。心を和歌にとりて躰を世俗に假りて。詠出べしと論せるの意を解するならん。これ彼が既に當時に於て抱ける處の卓見なりき。去れど世は別して。これを心にも留めず。和學者の一流は冷かなる眼を以てこれを見。和歌をかりて徒に狂歌をかざらんとせるなりとせり。又彼は狂歌を詠ずるの心得として。汚きものは決して

汚くよむ可らず。奇麗によみなすべし。賤しきものは自ら尊ふごとく氣高くよめ。これを歌の働といふと。以て千古斯道の遺訓とすべし。

今假令ば糞などの題ならんには。『花と鼻。匂ふ。腹のはると春風。臭きに草木』などよみ合せて詠み句体をきれいに取なすべしといふの類あり

今蜀山及蜀山が狂歌の友に關して。彼自ら其隨筆に記して曰く。江戸にて狂歌の會といふものを始めてせしは四ッ谷忍原横町に住める小島橘州なり(源之介と稱する田安府の小十人あり)其時會せしもの僅に四五人なりき。大根太木(山田屋半右衛門といへる町人。辻番請負なり。飯田町中坂下に住す。松本氏俳名雁奴)馬蹄(後飛鹿の馬蹄と號す。咲山氏田安府なり)大屋裏住(金吹町の大

屋なり後萩の舍と號す)東作(四谷內藤新宿の烟草屋なり。稻尾屋金右衛門といふ。へづゝ東作なり)四方赤良等なり。(予はじめは赤人といへしが。後赤良と改む) 其後大根太木。きり金を請とりに市令の腰掛にありて。かたへに湖月抄を讀むえせものありしを尋ぬれば。大野屋喜三郎といへるものにて京橋北紺屋町の湯屋なり。是れもとの木あみ事なり。此妻も亦狂歌をたしなみて智惠の內子といへり。それより四方赤良を尋ね來り太木もくあみともひて橘州をとひしなり。橘州の唐衣といへる號をつけしは。椿軒先生なり(編者曰くこれ橘州のきつをとりて彼の業平の『から衣きつゝなれにしつましあれば』云々の五文字に加へたる面白き沙汰なり)

又花弄集に唐衣橘州が序せるの一文あり。

（前略）其頃は友とする人。僅に二三人にして。月に花に予がもとにつどひて。莫逆の媒とし侍りにしに。四方赤良蜀山は予が詩友にてありしが來りて。おほよう狂歌は。時の興によりてよむなるをことかましくつどゐをなしてよむしれものこれなれ。我もいざしれものゝなかま入せんと。大根太木てふ者をともなひ來り。太木また木網智惠の內子をいざなひ來れば。平秩東作濱邊黒人など類をもて集るに。二とせばかりを經て朱樂菅江又入來る。是又賀邸先生の門にして和歌は予が兄なり。和歌の力もて狂歌自ら秀でたりかの人々より〳〵予がもと或は木網が庵につどひて。狂歌やうやく起らんとす。赤良もとより高名の俊傑にして。其徒を東にひらき。菅江は北にれてり。木網南にそばたち。予もまたゆくりなく西によりて狂歌の旗上せしより。眞顏飯盛金埒光の輩ついで起り。これを狂歌の四天王と稱せしも。飯盛はことありて詠をとゞめ。光は早く黃泉の客となり。金埒は其業により詠を專とせず。眞顏一人四方歌垣となのりて。今東都に跋扈し威靈盛んなり。まことに草鞋大王なり。又一己の豪傑ならずや。是につぎて名たゝるもの。淺草に市人。玉池に三陀羅をはじめとして。枚擧するにいとまあらず。ついで尾陽上毛駿相奧羽總房常越より其外の國々のすき人。日を追ひ月を越て盛なり。とかく世にひろごれるは。實に朱樂菅江がいさほしにして予はたゞ陳渉が旗上のみなりされど。又臭きを追ふの徒すくなからざるうちに。尾陽はすべて予が門葉のみにして。他の指揮をうけざるは。まさに雪丸田鶴丸王涌金成の桃吉有文の諸秀才よく衆をいざなふゆゑなるべし。上この頃東都の諸大人の。餘國の歌に評するにも尾陽を甲とし。

毛駿河これにつくと聞はべるに。予鼻うごめく計なるはげに我をれとす輩といふべし。こたび玉涌翁此冊子を人に託して四方の諸君の詠をこひ。弄花集と題して序を予にもとむ。もとよりいなむべきにもあらねば。繁文のたなきをもかへり見ず筆を醉竹庵にとるなるべし。寛政九丁巳仲夏

以て當時狂歌の俄に盛大を來たし。啻に都下に於てのみならず。天下靡然としてこれに趣くの有様なりしを想見するに足るべし。蜀山橘州木網等と相提携して殊に有力なりし朱樂菅江とは如何なる人ぞ。蜀山の記する處に曰く

朱樂菅江は牛込甘騎町にすめる御先手與力なり。もと内山先生に學びて本歌をよみし人なり。(朱樂菅江山崎を以て氏となし。名は景基將軍家基公の諱をさけて後景貫といふ。通稱は郷助字は道

甫淮南堂と號す寛政十二年十二月十二日六十一歳にして歿す)云々

靜山先生年忌の時内山先生の出題に

古寺鐘

あく鹿の園のわかれはさらぬだに
かなしき秋を鐘ひゞくなり

とよみしを。先生鐘ひゞく聲と直し給ひき。其時はじめて菅江の歌よみなる事をしれり。

菅江といふ名ははじめ俳名を貫立といひしゆゑ。皆人貫公〳〵とよびしを菅江と書したり。中頃菅江の名憚りあるべきかとて。漢江と改めしが。日光宮(公遵親王といふ)のきかせ給ひて。菅江にても苦しかるまじと仰せられしより。又もとの如く菅江と書した

り。是朱樂の学を加ふる事は。安永の頃吾やどにて。もろ人酒のみし時。戯に行燈の紙に。我のみひとりおけら菅江と書しを初とす。

とあり。俗耳鼓吹(蜀山編)『谷風梶之助身のたけ』條下に

力つよくして。ひとたびもまくる事なく。淺草藏前八幡の社内にてすまひありし時。小野川榮藏にはじめてまけたり。天明二年寅三月二十八日の日なり

手練せし手をとうろふのれの川や　　菅江
かつと東のわつといふ聲（勝）

谷風はまけた〳〵と小野川か　　赤良
かつをより音の高い取沙汰（松魚　擲　價）

とせる狂歌あり。これ當時に於ける大關谷風が小野川に敗をとりし時の詠なり。(かつ)(車)(より)等は思ふに相撲の手なるべし今芝愛宕神社に立てらるゝ所の碑にも蜀山及菅江の詠あり。

須彌山も富士も筑波も一同に　　蜀山
どつとゝ笑ふ春は來にけり

御殿山高麗芝の青疊　　菅江
花のふすまを引く霞かな

其他當時菅江の詠の狂歌集に入らざるは殆んとあらざるべし。殊に或細見の序にのせたる

五葉ならいつでもためしなさいけん
かはらぬ色の松のはん元

の如きは面白き作なるが如し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

猶はいふべき事少からざれども。今や一轉して狂詩及狂文を見ん。去れど蜀山は狂詩狂文に於けるよりも。狂歌に於て多く成功したりき。狂詩狂文に於ても彼が滑稽洒落の才見るべきもの少からずといへども。彼が才名は全然狂歌に依つて掩はれたりしなり。然れども蜀山を學ぶもの又彼が狂詩及狂文を知らざる可らず。彼の狂歌の和歌より出でゝ自ら卓越せる處ありしが如く。彼が狂詩は又眞面目なる詩想より産れて。世に秀でたるの吟をなせり。其彼が少壯時代に於ける詩作は。多くみれ眞面目なる漢詩にして。然も其韻平凡にあらず。

暮過山寺

白日收二餘照一。幽溪鎖二積陰一。不聞二孤聲響一。寧入二數峯深一。

無事僧歸レ院。爭レ棲鳥滿レ林。上頭何處遠。昏黑恐難レ尋。

癸卯十月八日下總國相馬の農夫名は富吉字を甚内といへるもの。牛込街頭に其父仇を斃す。富吉性至孝父母につかへて奉養至らざる處なかりき。然るに同村中些々たる事情よりして富吉が父を殺して去れるものあり。富吉悲憤自ら禁ずる能はず。其仇を求めて江戸に來り。或は大坂に或は京師に徘徊し。茲に十七年を經て終に其仇に會し直に之を討ちたるなりき。蜀山これを見て感慨禁ずる能はす。一詩を賦して。其孝を頌す。詩に曰く

十七年前一失レ怙。藐焉天地泣二諸孤一。
甘心若不レ殲二讐仇一。結髪何堪レ列二丈夫一。
耒耜舍來身伏匿。寶刀揮處血糢糊。
北風吹レ雨牛門市。一日英聲振二大都一。

と其他其眞面目なる詩作世に傳ふるもの多し。蜀山人詩集の如き其一なりとす。然るに彼は詩家として斯の如き技量を有しつゝも。何故に狂歌人として世に立たんとせるや。彼は雞口たるも牛後たるを甘んずる能はざる人物たりし。其氣概は左の江城春望の一律に依つて明に見るを得べし。

春滿江城八百衢。豪華到處見二雄都一。
氣晴餘雪含二山色一。日出飄霞散二海隅一。
柳外塵埃誰並レ馬。花間粉黛共當レ壚。
醉來寧伴二諸年少一。不レ作二乾坤一腐儒一。

と以て彼が何故に狂詩人となり。狂歌師となり。狂文家となれるの意向を察するに足るべし。

彼が狂詩に於て見るべきものをあぐれば。

東方客　擬唐詩撰

東方遊客臨二遊所一。羽織醉亂始歌舞。
船頭朝飛新地雲。暖簾暮捲土橋雨。
仲町檣下切悠々。山開祭度幾春秋。
三十三間堂何在。如レ矢光陰空自流。

贈二看レ花書生一　誤字を用ゐ來つて暗書生ナマモノシリを罵る

尋レ花雅人共。行讀二懷中書一。無レ幕艸爲レ寧。有レ鐺石作レ如。
水交三升酒。蠅集片身魚。陳奮詩成後。一盃食又噓。

櫟園狂生蜀山に寄するの詩あり

先生趣似二東方朔一。玩レ世年來面白遊。
一段機嫌酒疑レ浴。百篇狂詠筆如レ流。
近鄕在町頭レ風起。遠國波壽結レ社稠。

打レ犬見童知ニ寐惚一。　名高六十有餘州。

蜀山これに和して曰く

誰道東方九千歳。　竊レ桃三度世中遊。
功名已共ニ金錢一擲。　日月徒隨ニ賀物一流。
桔梗御紋看レ瓦入。　櫟園言葉學レ狂稠。
先生寐惚嚙レ臍久。　未レ到ニ毛唐四百州一。

當時狂詩人として名高き銅脉あり。銅脉姓は畠中名は頼母京都聖護宮に仕ふ狂詩を以て當時に鳴る其詩草及蜀山の詩草を集めて世に公にせり二大家風雅これなり。蜀山と親交ありたるが如し。其應答の狂詩あり曰く。

寄ニ銅脉先生一

銅脉先生自一流。　滅法海上欲レ浮レ舟。

唐巴詩映勢多水。　遺響人偷物澤樓。
聖護院邊君已聖。　牛籠門前我如レ牛。
更吟小本太平樂。　婢女行篇鬼濕レ眸。

銅　脉

酬ニ寢惚殿見一レ寄

皮厚年々馬鹿濃。　酒醒一夜憶ニ關東一。
應生祠古祇園外。　物澤樓高江戸中。
習井風寒大名走。　下町米貴小心窮。
地震洪水君無恙。　御作數篇幸便通。

寢　惚

答銅脉見寄

菊桐秋盡素寒貧。　花開南鐐八片春。
佐渡金山何處在。　後藤光次孰家親。
波錢九十川難レ越。　椎員三文時未レ臻。

近日嚢中無二小遣一。　頻思銅脉一與ㇾ人。

答ニ寝惚先生見ㇾ寄和韻　　銅　脉

更笑先生亦病ㇾ貧。　治ㇾ貧藥不ㇾ見ニ回春一。
久悲銅脉難ニ通用一。　何故金箱能得ㇾ親。
誠恐謹言合力賴。　實正明白案文臻。
酒家近附都相倒。　乘ㇾ勢卯交世上人。

當時は銅脉は狂詩を以て京洛の間に鳴り。蜀山又東都に雄視す。右應答の詩を以て比するゝ其優劣容易に判し難し。

題ニ江口遊女騎ㇾ象圖一

江口遊君尻自重。　普賢大象鼻何長。
文球若衆是馴染。　不ㇾ駐ニ西行乞食坊一。

客僧行　以下擬唐詩選

棚經坊主清明香。　持佛拜來金箔光。
但使ニ主人能與ㇾ百。　不ㇾ知何處是西方。

戯贈ニ丁子君美人一

紅粉青娥映ニ素顔一。　櫻花坐上二丁間。
野夫獨向ニ閨房一去。　讓學ニ釋伽一入ニ涅槃一。

早發ニ惡態言一

朝衡惡態障ニ人間一。　千理口論一日頒。
兩町俠聲鳴不ㇾ住。　喧嘩已過捧擅顔。

越中番子

越中犢鼻破ㇾ尻頰。　番士還家搔ニ總身一。
木虱如ㇾ花滿ニ縫目一。　只今惟有ニ懷中紐一。

將　棊

玉將徘徊恐二桂香一。飛車走去不レ稱レ王。
盤上靜時無二一戰一。歩兵飜作二成金光一。

猿牽の畫に

身代在レ嚢猿有レ肩。不レ堪二煩惱犬追懸一。
朝四生レ烟二一升米。暮三起レ浪百文錢。

猿曳(さるひき)の百一升(せう)の米(こめ)と錢(ぜに)
あしたに四軒(けん)暮(くれ)に三軒(げん)

題鍾馗留守鬼洗濯圖

冠劍猶懸壁。鍾馗非レ出レ門。請見鬼洗濯。不レ洗二虎皮褌一。

菅原傳習手習鑑

本院時平東上乘。梅櫻忠義向レ松凝。
讒言二一人袴洗レ浪。齊世親王菅相亟一。

題田樂豆腐

三五美人差櫛通。肌欺二白雪一扇生レ風。
岡邊煖レ酒燒二楓葉一。席上敷レ氈愛二竹筒一。
眞崎箱連二狐色一黑。池田炭映二鳥居一紅。
相撲入道淮南子。共是千秋好物同。

聞澤村宗十郎改名

觀世水流溢二澤村一。宗徒最氣若レ雲屯。
十千万兩金箱勢。郎黨合紋い字繁。

七種

拔レ松拔レ竹御門前。叩レ菜叩レ菜俎板邊。
唐土鳥兼二日本鳥一。東天未レ渡素天々。

初冬遊曹司谷

十月曹洞谷。花開會式筵。一天歸二妙法一。百度至二神前一。音掛二長珠數一。手投二御賽錢一。三盃燗酒勢。不レ羨二祖師綿一。

雲林庵見二玉梅文鳳二女史一。玉梅善レ書文鳳善二詩及書一。三月初日

文鳳如二卅月一。玉梅似二玉山一。昨夜一軒店。見二此二人顔一。

狂文に至りては風來の如く嫌味なく。一九三馬の徒の如き駄洒落なし。以て蜀山が爲人を見るに足るべし。

火をいましむる詞

火は五行の一にして。民生一日もかくべからざるものなり。去れど其災をなすに至りてはむかひ近づく可らず。天下は猶さくべし。人火はつゝしまずばあるべからず。禍を轉じて福となすには。その徳をさむるにあり。柳々州が王參元の失火を賀する文も小むづかし。われに七字の秘文あり。毎朝手あらひ口そゝぎ。南にむかひて三遍となふべし。その文に曰く『家内安全火用心』ゆめ〳〵うたがふ事なかれ。

猿寺禪師七十賀詞

人生七十古來稀なり。といひし詩人も。五十九歳で食傷してうせ。七十從レ心所レ欲とのたもふ聖人も。たつた三年矩をこえず。八十年胎内にゐられた老子のれ袋も。迷惑なるべし。たしか七十九とやらで跋提河の泡ときえし佛は。常在靈鷲山とていつまでもまめ息災をきくも片便にて。心もとなし。こゝにさる寺の大和尚の七十の壽の文をつくれとさる人のもとめいなみかたく。千年の鶴萬年の龜。松竹のときわも古めかしければ。彼の佛説の那由陀阿僧祇五百塵點劫四十六億七千萬載彌勒佛のせり出した。さし出の蠟燭てら〳〵と鼻の先へ出るまでに。高野六十四年の少年蜀山人の

請合なるべし。文化九のとしみづのえさるの尻も。大晦日にちかきころしるす

すり小木の詞

もろこし杭州の人は日ごとに三十丈の摺槌をくふといへり。いはんや萬國の都にすぐれたる大江戸の百萬戸二百六十餘の公侯。八萬騎の士大夫。二千餘町の市町。寺社倡優の數をしらず。一日に何萬丈のすり小木をくはんと思ふも。例の江戸自慢にして。豆腐をはかりにかけて食ふ。祇園守の紋つけたる上方者などは。駄味噌を上るとわらふなるべし。

酒色財

一休は兒を若俗とよひ。ある人役者を男傾城と名けて老年の樂とせり。むべも日月江海のでんぼうに。風雷鼓板のじやぎりとは。

天地一大戯場の中に乾隆の座元の名言なるべし。又わし引の巨燵に伽羅をくゆらせ大夫と二人かもねんとは。油煙齊言因のうたにして。小傾城ゆきてあぶらんとは。晉子が師走の廿日頃よりみせを引たる内證の遊ならん。すべて劇場青樓の樂は。老少となく雅俗となく。この上やあるべき。されど難波の西鶴が。野郎翫はちりかゝる花の前に狼のねてゐる如し。傾城になじむは入かゝる月の前に提灯ないてゝろゞかし。と好色一代男に出しもことわりなり。さて又儀狄とやらんがはじめてつくれる。狂水といふものこそれかしきものなれ。上戸はをかしく罪ゆるさるゝものなりと。双が岡の色法師もいひ。盃は斗なし亂酒は御無用と親父ものゐひ。五戒の中でも遮戒とやらと。少し詞のにごりより。その糟をくらひそのしるをすゝるもの少からず。されどその酒色のふたつも

財といふものなくては。その樂を得がたし。たもふとふたつのけたる其跡は。花の都も田舎なりと芭蕉の翁も申され。三不惑と口ぎれいなる唐人の寐言も心もとなし。その財を生ずるに大道あり。食物は小勢でくひ。仕事は大勢でせよ。これ用ゆるもの舒なる時は。財つねに不足なしと大學にも見え。民生は勤るにあり。かせぐに追付く貧乏なしと。左傳にのせしもこゝらあたりなるべし。願くは金の番人守錢奴とならで。酒色の二つも程よく樂まば。五十年も百年も。むかひ百年も千代よろづ代の心地なるべし。

千早ふる神代の昔もしろい
事をはじめしわざをぎか道

全盛の君あればこその里の
花もよし原月もよしはら

世の中はいつも月夜に米のめし
さて又申しかねのほしさよ

千秋井の記

千秋井のほりぬき井戸より。水と金砂の出しとは。平澤氏のきさんじに書ちらされしより。平澤のひらたくあやまり入りて。外にはるべき穴も見えず。されどなかしても〱ぬけめなき朝白園のもとめいなみかたく。こかねの砂のかづをひろはゞ。むかし周の國の御家門。魯國御殿の御家老をつとめし。李桓子とやらいふた人あり井をうがちて羊を得られしに。御家老これをあやしみて。千年むぐらのたぐひにやと。孔子といふものしりをよびてたづねられし時。何やらむづかしき事を引て。木石の怪を鬼畜といひ。山の怪をもゝんがはといひ。水の怪をかつぱの屁とやらいふと答

へ給ひしとなん。もとより紅皿闕皿の籠耳の事なれば。筒井づの井づゝにかけし丸でくはしくは覺えはべらず。翁かむかしいとけなかりし時。よな〳〵きゝし物語の耳にのこれるあり。むかし〳〵舌きり雀のれうぢおうばの物語に。重き葛籠の中よりは怪しきもの出。かろき葛籠よりはよろづの寶いでしときく。此度ほり給へる井戸よりしてこのごろもてあそびし五冊物の化物は出ずして。めでたき水とこがねの出してろ。舌切雀のつゞらのためしにならはゞ。心まめなるむくひなるべし。これ正直は日天さまかけて淺草のうばの名のみにあらず。終に日月憐をかうぶるかうべに。神の宿札をうちたまふところとなん。されば堀ぬきのゐのふかきめぐみありて。若水はやき車井の。めぐりよき幸來るべしとまをす。

巣鴨の菊

月令の月行事は菊に黄菊ありとてふた茶碗の菊味を味ひ。五斗米のすで扶持ぞいやがる五柳先生は。きくを籬のもとにとりて。白丁の德利の來るをまつ。又佛くさい蓮華好きの濂溪殿は。菊は澁谷の隱居とやら隱逸とやらいはれしか。ちか頃巣鴨の五軒町七軒町も。いつしか五十軒七十軒となりて。駒込染井のはてまでも。百種のつくり物千狀の化物所せく。東籬も花壇も百姓やも。御酒肴即席料理。十王の勸進もくはふがため。十念の和尚さまはくはぬかためも又ありがたし。

國應寺すがもの鐘につきませて
富のばんづけきくのばんづけ

十八羅漢圖讃序

大明の世帶崩し蘖連の和尚たち。十八羅漢の圖を書きて。その次

の羅漢〳〵に順の舞の偈頌あり。そも讃だやら何だやら面白くもなんともなし。片手にならすてうち〳〵。おなゝき笛のおは〳〵まづ一棒をふりわげて。つふりてん〳〵天竺の。子供あそびの遊戯三昧。ちと流行にはれくれたれど放下師の。小刀のみ込。すうたの聲聞根性。おな三九の羅漢や〳〵

鷹の詞

賽一休　　蜀山人和南

そも〳〵鷹は仁德天皇の御代に百濟より奉る名を倶知といふ酒の君といふもの足緒をさし鳥をとらせて叡覽にそなふ百舌野の行幸これなりそののち嵯峨天皇新修鷹經をあらはし及び寛平延喜よりこのかた禁野かた野の野行幸しば〳〵なりき文官は右にすゑ武官は左にすゑし鷹の身よりたなさきかはるといへる歌は此ことわり

をしらぬなるべしそれ鷹は瑤光の星の精にして鐘岱の山に生るといへり春鳩となるは仁なり秋戮を行ふは義なり食するにさきをわすれざるは敬なり誅するに强をさらざるは勇なり遠きをてとくくみるは智なり此五常をそなへていちもつの鷹とす雄略の野守の鏡寛平の宮瀧の勝負萬葉のはつとかりはいはせ野の秋萩をしのぎ源氏の鈴船は須磨明石にひゞく二條攝政の記に秋津神平の名をつたへ日下部敎景の菊鷹に建仁東堂の筆をふるふ一富士二鷹は初夢に見てさへよく鵜鷹逍遙は今川狀の第二章なり士に鷹飼鷹生あり農は網さしせたの者工は鷹はての方法をきはめ商は鷹秤をはかる古き諺にも百貫の鷹も拳をきつて放たねばしれず鷹は死すとも穂はつまず大ばね折て鷹にとらるゝ羽向のよいも鎌子のよいもみな古の鷹詞にして丸をとるうちをつくの類なるべしいひつゞくれば

夜すゑの鷹のながくしくきじのかたもゝたかのすきの廻文のは
てしなき四十八鷹の數々をとつたか見たかに書きしるせれば廣
野の鶉のれち多くかりのこしたることもあるべし
其他世に傳ふるもの實に少からざるべし。今やこゝにこれを略して
彼が眞面目なる文字を見ん
享和二年壬戌十二月十九日に七月既望の盟をつきて再び墨田川に
舟をうかべて。月見し事ありき。同遊の者七人所謂篠本廉。竹堂
鈴木恭。白藤井上玖。子瓊鱸文。猶人山本鄰。德甫中村亮。子寅
書肆樂地堂等なり。予戲に賦のやうなるものをつくりて一時の遊
を記せり。人みなこれを後々赤壁賦といはんなど笑ひ興じき

遊二墨水一賦並序　　杏園主人

是歲壬戌七月既望與二諸子一泛二舟墨水一欽二於蘇公赤壁之遊一也十月

之望有レ疾不レ果若二夫諸子一則復遊レ之矣按蘇公年譜及記年錄十二
月十九日爲二生日一置二酒赤壁一然則壬戌三遊二赤壁一而前後二賦膾二
炙人口一生日之遊人不二或記一蓋以レ無二其文一也。是日陰雲新霽天氣
肅然乃與二井鱸二生一昏暮敲二竹堂門一主人欣然相迎酒二三行豪氣十
倍又促二山村二子一訪二白藤書齋一相携而出道過二樂地堂一與會二牛門
市一買レ舟又遊二於墨水之上一斯遊也不レ期而得二友七人一亦不レ奇乎因
不二自量一作二爲斯文一其辭曰乘二墨水之長流一擬二赤壁之舊遊一提二挈
芝蘭之交一容二與竹葉之舟一廻二茗溪一下二柳提一出二曲岸一望二東西一兩
國之橋宛如二虹霓一霜氣滿レ天北風凄其積陰蒼茫不レ可二端倪一時乃萬
物閉塞群動滅息流光湜々水波如レ織寒月揚レ色玉鈌石泐裂二三派之
素練一啓二九重之淵默一皎兮如二氷雪之逼一卓乎如二斷山之嶷一恍焉惚
焉如二神仙之不一レ可レ測也畜德甫有下操二糸桐一者上新得二古琴一沈思而高

吟器冷絃調山虚水深峩々之徳洋々之音得ニ之敏手ニ而應ニ於閑心ニ漸近ニ自然ニ餘音暗々於レ是合レ尊促レ坐献酬交錯放ニ肆大川ニ談笑嗢噱不レ知舟楫之載ニ形骸ニ邪抑形骸之載ニ營魄ニ邪蘇公逝矣天地非レ昨至レ今七百二十甲子孰知下有ニ今夕ニ者上上下千年唯有ニ孤鶴ニ

竹本豐竹浄瑠璃譜序

享和とあらたまりぬるとし。蘆がちる難波にありて。此書二まきを得たり。竹本豐竹ふたつの園にかたりものせし戯れ文の名を書きつらねて笠翁傳奇の種より。傴師（周の國の木人を作れる人なり）舞木の態にいたるまで。見あつめ聞あつめて。諸事聞書往來としるせり。今其名の雅ならざるを惜みて。あらためて竹本豐竹浄瑠璃譜と題す。世に浄瑠璃年代記などいふものあれど。擇びて精からず。語りて詳ならざりけらし。

甲子（文化元年）仲春幾望

杏花園主人

牛門のやどりにしるす

俗耳鼓吹序

からうたのくすい（鼓吹）俗耳のいしはり（砭）とうちず（誦）しつゝ。さかなてとりける小柑子をとりて。みきたうべばや。は聞やしけん。もろこし人の鶯にはあらぬ。だみたる聲に鳥がなく。あづまなまりにいひつたへたる。みやこのてぶりかいつけぬれば。かの大なる聲の里人の耳に入りがたうする。くすいにはあらじとてなん。俗耳鼓吹といひ侍るもかたはらいたしや。

天明八のとし水無月　杏花園

等枚擧し來らば實に其繁に堪えざらんとす。今や余が狂歌狂詩狂文

の一班を讀者に介するの責を終れり。讀者或は余が玉石其架を異にせざるを難じ。或は精粹をすて丶糟粕をとれるを笑ふものあらん。去れど讀者よ余は啻茲に余が蜀山の腕前として確に價値あるもの丶みを擧げたるを自信せり。其句其文華なれども。其意極めて卑猥なる傾あるをば捨てたり其の意愛すべけれども其句其文見るに堪へざるものをも省きぬ。乞ふ聊か諒する處あれ。

●蜀山が評判

當時蜀山が評判は非常なるものなりき。『狂歌はれれ』と自ら彼がゆるせる程世はこれを好遇せり。故に何人といへども彼を識るの故を以て肩身ひろく思へるなり。大坂の鴻の池江戸の白木屋の如き富豪皆爭つて彼が染筆を乞ひ。以て一の名譽とし。一の廣告とせり。況

んや酒樓の如き遊閣の如き。蜀山が書を楣間にかゝぐると掲げざるとに依つて。其盛衰榮枯に關せりとなして。禮を厚ふし辭を卑ふして其門に至り。其揮毫を乞ふもの陸續として絕ゆる事なし。夫れ蜀山が一毫の狂詠は。斯くの如き信用を有し功力を有するが故に。狡奴或は其書風を摸擬して。自ら蜀山なりと詐稱し。地方を遊歷して潤筆料を貪りし者もありけるなり。見よ彼の歌妓小万の如き啻蜀山が一席の戲詠によつて。よく全盛の運に會するを得たりしならずや。又僕逸助の如き一個だも買手なき百餘の盆燈籠を。其狂詠を請ひ得たるばかりに。速に價を倍してこれを賣下げたるにあらずや。壁紙にとて彼が得たりし故紙の。如何に高價なるものなりしや。思へば實に今日よりして。吾人の想像に畫き能ふべきにはあらざるなり。蜀山の得意以て見るべきあり。

當時蜀山が門下に文寶亭あり。蜀山が張端圖の筆蹟を學び得て。頗る其妙を得たりしかば世人は蜀山が筆か文寶亭が代筆をよく判するものなし。蜀山自身すら時にこれ辨別にくるしむなど語れりといふ。故に多くは文寶亭に代筆せしめて。自身に筆とる事は稀なりしなり。

物之本江戸作者部類によれば。文寶亭は書をも少しは書き。狂歌狂詩をもつくりたれど。させる秀逸と稱すべきものなし。元飯田町中坂の茶舖龜屋の婿養嗣。久右衛門と稱し。蜀山には早くよりして師事し。其筆蹟の神髓を得て

彼紫の朱を奪ふ菖蒲燕子花とも云はましとてよく玉石を辨ずるものなし(江戸作者部類)

といふ程の有樣なれば。蜀山も世の數限なき求に應じて。自ら筆を

る事の到底堪ゆべき事ならねば。文寶亭のよく其筆蹟を得たるを幸ひ。多くはこれに代筆せしめたり。乞ふものにとりても蜀山が眞蹟を得んとして。空しく半年若しくは一年も待たんより。蜀山の署名だにあらば。假令文寶亭の僞筆なりとも。速なるを却つて喜びて續々乞ふもの多ければ。終には公然文寶亭が代筆したるなり。而して時に書を乞ふもの稀なるの日。蜀山自ら筆をとる事あり。

たま〲乞ふもの稀なるの日。主翁自ら書くとおれば主翁は〻笑みて。今日偶ま客多からねば。據なく自筆をもて御需に應じ候なりといはれたり。(前回書)

とあるにても。蜀山が如何に多くの需に逢ひて苦しめられしやを知るべし。文寶亭は實に蜀山の爲に非常なる重寶なる男なりしなるべし。文化の頃此文寶亭がものせし三冊物の臭草紙ありしが。さして

世に行はれざりけん。今は其名だに傳はらず。文政の頃生計に窮せるより。其店をば親戚某に讓りて。下谷三筋町の邊に居を移し。名をも久助と改め。蜀山歿後剃髪して師の雅號を乞受け。蜀山人と號せしも僅の間にして。文政己丑の春三月廿二日。享年六十二歳を一期として。傷寒を病み逝去せりといふ。

夫れ素より以上の有樣を以てすれば。文寶亭は蜀山の筆蹟を得たるの外。他に一の能事なきが如くなれども。

風流好事は餘の戯作にも立まさりたる趣あり。素より好人物にて云々（前同書）

とあるのみならず。文章とても決して拙なりといふにはあらず。蜀山は常に文寶亭を愛すること子の如く。文寶亭も亦其手となり足となりて。一身を師にさゝげ働きたるなり。故に翁の著書多くは文寶亭

の力によれるもの多く。彼は啻に師の著述をたすけたるのみならず。自ら師の肖像を畫きて其卷首にかゝげ。又板下をも自ら筆をとれる事多し文寶亭蜀山人と稱するの前。食山人と稱せる事あり。『千紅万紫』の後序に曰く

いにし明和の頃陳奮翰の寢惚先生文集土平傳天明のとし四方赤良の万載後万載才藏集四方のあか又通詩選檀那山人藝者集などみな去年の暦にして其時々の流行なるべし下里によせて巴人亭あり浪花にありては蜀山人ありその蜀山の兀として遠山鳥のさくら木に殘れる花の千紅万紫花でよみのこまかに見あつめにた山の字かきちらしつゝ眞名と假名とをもえらばざるはもとより口〇屋の板なればなるべし文化丁丑の春食山人飯臺にしるす（巴人亭四方赤良等共に蜀山が別號なり）

此文によれば文寶亭は蜀山既に在世の内よりして。食山人の號をば

用ゐたるが如し。蜀山が歿せるは文政六年四月六日にして。此後序は文化丁丑とあるを以て見れば。文化丁丑は十四年に當れば。蜀山翁が六十二歲の折にやありけん。

又文寶亭が假名世說に跋して曰く

いにしへ無義の人あり今建節の士ありと論衡に見えたれど善惡雜厠みな其稟得たる性のなす所にして古今なんぞ是をわかたん文筆なしといへども義あるものはかならず道をいたし學習ありといへども義なきものは遂に惡をなす辯士則ろの久しきを談ずるもの文人則其遠きをあらはす者文人辯士わたくしのこのむ所をしるしてよしあしを談ぜざるは亦是貴鵠賤鶏の說なるべし我師蜀山先生慶元以來（慶元なる年號なし慶長元年の略なるらずんば慶安元年の略語なるべし）世に聞えたる人物を集めて假名世說と題して書るしれかれたるものあり書肆瑞星堂のあるじせちにもとめて梓に鏤ん事を乞ふといへども先生ひさしく病床にいましして筆とる事ものうしとてれのれに其たらざるを補へよとあれど元より書に乏しければ或は師の藏書より抄出しあるは友人にもとめまたはみづから記臆した事どもをも書ろへていさゝか是を論じてれを補ふといへどももとより我性愚にして且いやしければ撰ぶ所も又これ性によるあらんたとはゞ珊瑚にまじる石瓦なるべし

文寶亭しるす

又假名世說に文寶堂散木補とあり。散木は彼が別號なりしが如し、去れど多くは師說を聞き師說に從ひて筆をとれるなり又南畑莠言の如きも

我師からもゝの園のうし年比この國かの國のふる事ども何くれと

なく書おつめおき給へるを此まゝにうちれかんもいとねんなく人にも見せまほしうてうしへその事きこえまゐらせしにさらばれのれにものせよとの給ふまゝになりはひのいとまあるをり〳〵これをぬきがきしつゝふみやのあるじとはかりて木にゑらせつるを一わたりみ給ひて南畝莠言と名づけ給へれどこれはしももとよりもとよりはぐさにわらず此草一たびつむ人は二たびつまん事を思はん云々

と文寶亭の後序によりて　其彼が勞せる多きを見るべし。其他蜀山が百餘種の著書。十中八九は彼が筆を勞せるありき。これを以てみれを見るに蜀山翁が名の世に知られたる幾分は實に文寶亭の働といはざるべからず。

蜀山翁に書を求め狂歌を求めなどする人々。前述せるが如く多數に

して。此額面に。此幅に。或は此其書に讃してよ。此柱かくしに目出度もの一首ものしてよなど引もきらず。翁は流石に五月蠅や覺えけん。左の壁書をなすに至れり。其前書を以て當時の有樣を察すべし。

書齋の壁書

年頃吾が書を請ふ者多し。扇子。團扇。扁額。屏風。服紗。唐紙和唐紙。いやな羽織の胴裏に至るまで。累々としてはてしなければ。吾その請ふもののうるさきによりて。上中下の品を定む。上は速にかくべし。中は預りて書くべし。下に至りては書くべからず。若し聞かずしてあづけ置くものあらば。扇は鼠の喰むまかせ紙は反古堆中に沈めて永劫浮ぶ瀬なかるべし

上の部

一詩歌の心をも辨へたる人

一詩歌の心は知らねども甚だ是を信じてたくはへ置く人

一名人の書の讃

一表裝至つて美にて掛ものにする人

一美人の直き頼み人傳手の依賴にては受取らず

中の部

一詩歌の好なく何にてもよろしきといふ人

一人に遣るにでもなく自らおさめおくといふ人

一扇一二本短册一二枚唐紙一二枚好む人

下の部

一惡書惡紙和唐紙を辨へざる人

一遠國へ近く旅立人に贈るといふ人

一小肴の價高ければ扇にかゝせてやるが德用といふ人

一何か一向わからねど書かせて置くが德と心得てむせうにかゝせる人（此類婦人に多し）

一筋違御門外の古道具屋山下あたりへ賣る人

此外いろ／＼な事だらけにして見る目もうるさき事多しあたら光陰を費して慾深きものゝ目を悦ばしむるに忍びず仍而壁書如件

上の第五項『美人の直き頼み。人傳ての依賴にては受とらず』とせるに至つては。其一項に『詩歌の心をも辨へたる人』及第二項『詩歌の心は知らねども。甚だこれを信じてたくわへ置く人』などゝ定めたる翁の心には似氣なく。翁は好色家なり。俗物なりなど速了する人も無きにしもあらず。去れどこは翁が戯にして。させる繩墨を以てこれを論ずべきにもあらず。却つて翁が世の生學者半可風流の人々

の」表に純潔なる君子を粧ひつゝ。密に醜行汚穢あるものゝなす所に習はず。）天眞其まゝの人情好む處を憚る處なく。書つらねたるなりとせば。」爲に翁が尋常迂腐の詞客にあらざりしを見るべく。翁の翁たる所以實に此一項にあるを認むるに足らん〳〵

又翁は世の潮流に驅られ。一には書肆が需切なるより（當時翁が盛名を利用せんとの考を以て）臭草紙の類に筆を染むるに至れり。去れど到底戯作は翁の能くする處にあらず。從つて其著書させる好評はなかりしが如し。今其著書として（戯作）世に傳へらるゝもの

重ね〳〵目出度春參。　漢國無躰此奴日本。　二度の賭。

唐錦並關取。（春湖畫二册合卷うろこがた屋板）　頂邊香有。　江戸花海老。　壽鹽商

婚禮（二册もの）　棟手僞無。

等にしてうろこがた屋の板をのぞきては大概蔦屋重三郎（蔦唐丸と稱す又號して耕書堂といふ寛政中通油町に住す名を柯理といひしもいふ物之本江戸作者部類に曰く『天明の初賈耕書堂蔦重（狂名を蔦唐丸と云けり然共自ら得讀まず代歌にて間を合したり）が吉原なる五十間道にありし時出（天明中通油町なる丸屋といふ地本問屋の店庫奥庫を購ひ得て開店せしより其一身一期繁昌したり）其板を購ひ求めて板元になりしより序文はかならず四方山人に乞ふて云々顧ふに件の蔦重は風流もなく文字もなけれど世才人に勝れたりければ當時の諸才人に愛顧せられ其資によりて刋行の冊子皆時好にかなひしかば十餘年の間發跡して一二を爭ふ地本問屋になりぬ世に吉原に遊びて産を破るものは多けれど吉原より出でゝ大賈になりたるはいと得がたしと皆言けり當時の狂歌集に代歌せられて唐丸が歌の入らざるものなかりしかば其名田舍にまでも聞えていよ〳〵生活の便宜を得たりしに惜べし寛政九年の夏五月脚氣を患ひて身まかりぬ享年四十八歳なり墓は三（山）谷正法寺に在り南袖翁墓碑を撰述して石に勒したり云云』戯作も代作なるべけれど本樹二眞猿浮氣嘶（二册物）身體開帳略緣起（二册物）養山伏批孤修怨（二册物）等あり難波に八文字屋自笑あり江戸に蔦の唐丸あり共に東西の一佳話として傳らるゝなり）が板なりしあり。翁は且つて風來

山人に小説を作るの法を問ひたる事あり。其答に曰く

小説は戯れごとなれども實事を踏み不申候てはおさくと聞え候夫も書の躰により候譬へば針を棒に云なすは虚の虚なり箸を棒とするは虚の實あり棒を棒にて削て使ふは實の虚なり棒を棒にて遣ふは實の實なり都て小説は箸を棒にて遣ふ躰にて然るべし（鶴見吐香氏の說）

これ當時翁は戯作に筆を染めんとの考を抱きて。風來山人には問ひたりけりぬ。これより時々戯作をなしたるなり。去れど戯作に於ては風來以外當時二大文豪あり。二大文豪は誰ぞ京傳馬琴これなり。翁が小著のいかで此二者に及ぶべき。翁は戯作に於て寧ろ失敗したりし一人たり。それにつきて江戸作者部類に記して曰く

四方山人◯草ざうしの作。其趣をなさゞれども。安永天明の間二冊物三冊物の新版様々出たり

これに依つて推する時は。前に掲げたる書目の外猶幾多の戯作ありしやも知るべからず。其趣をなさゞれどもとの一語。明に當時の評判さしてよろしからざりしを説明し得て餘あり

戯作の才は喜三二（手柄の岡持なり）春町（著者曰戀川春町をいふ當時の戯作者名は倉橋壽平格作者部類に壽平とあるは誤なるべし駿州小島藩の家臣江戸の人なりといふ小石川春日町に住けりといふ又壽山人と號し俳名を酒上不狩といひけり）の二の町にの尤けきわたり作はなかりき。天明中此作者の二冊物の草冊子に（書名を忘れたり）猿が龍宮にて。京鹿子娘道成寺を踊る所の詞がきに。かねうらみはさる〳〵五猿といふ書入あるを予も見たり。以て翁が戯作の不評判なりしと。其作意唯に滑稽を主とせしものたりしを知るに足らん。又同書に翁が狂詩に關せるものあり

當時戲墨の小冊幾種か出たり。所謂酒落本にあらねども狂詩の如きは時勢粧を諷せしもの多ければ他作の酒落本と共に行はれたり。

以て翁は戲作の才には拙けれども。狂歌は勿論狂詩に於ても成功したるを知る。然るに翁は狂歌狂詩に於ける才筆と其盛名とを猶ほ一歩を進めて戲作界に及ぼさんと試みたりしならんか。やはり酒屋は酒屋餅屋は餅屋なり。喜三二春町にすらも勝る能はずして遂に止みぬ。又

天明の季より四方山人は青雲の志を旨とせし故に狂歌をすらやめければ。細見に序をつくらずなりぬ。云々天明七八年以來憚るよしありて。戲作をせずなりぬ。此頃迄吉原細見の序も。毎春改正の度々に。この人綴りたり云々

これ他に青雲の志などありしにはあらず。安永八九年の頃より。卑猥の戲作世に行はれ風俗を害する事少からざりしかば。幕府も之を傍觀する能はず。俄に嚴令を發してこれを禁ずるに至りしかば。世体一變して戲作も軍記物語など行はるゝに至り。卑猥なる戲作をなすものは自ら賤め却けらるゝに至りしかば。翁も大に悟る處あり斷然戲作を廢し。細見などの序をばつくらざりしならん。去れど狂歌狂詩は依然としてこれに遊び。(せいしつと云々の狂歌の爲に禍をうけ一時廢せる姿ありしも現よ萬紫千紅千紅萬紫の如き。文化年中に公にせるものに非ずや。故に後説憚るよしありてとせしは穩當なるに似たり。戲作を廢したるにつきては。唯以上の原因のみにはあらずして。其作の世に歡迎せられざりしが故に。翁も早く見切をつけたるならんか。

兎も角も當時に於ける翁の評判は非常なるものたりしあり當時周滑平なるもの妙々奇談を著す其内に現心地藏相なる一欄あり太田錦城を捕ひ來つて巧に當時文客の俗氣紛々たるを罵る條下に蜀山人を稱揚せる一節あり

北の方を見れば。凡ならざる異人一人の老翁と酒を飲みて樂しむ。異人老翁に盃をすゝめて曰く世を翫て世を離れず。老翁と我となり。君が爲めに壽をなさんと面白く諷ふ其詞

おもへばむかしろのむかし　君がねぼけし
寢言には　浮世の穴を　うがちたり
金魚頭の　堅學者　唐人めかす
享保學　團子の如き　肝をけし
其後味噌では　なけれども　四方の赤とて

世の中の　皆人毎に　もてはやし
貞柳風を　見やぶりて　江戸紫の
たはれ歌　はじめて詠し　其中に
今にゆかりの　分根しみ　異顔な人じや
連中に　朝夕口に　忘れざる
飯なにとやら　其外も　皆是君が
こはれ種　石部金城　かたくあに
にじきの城を　堅めたる　放屁儒者が
ろしるとも　屁とも思はぬ　君はろも
我とはくさい　中なれば　鼻をつまんで
ちよつきりに　舌切雀まはらぬ舌で
壽いわふ松の位　いともれかしくれほし召なん

四里四方廓に名ある君達の
ゐ中にも高きれ蜀山人
以て蜀山が勢力を察すべし。名儒太田錦城をさへ凌ぐに至れるが如き。豈に蜀山も亦人傑ならざるなからんや。同書に當時の番附めきたるものあり面白ければ左に掲ぐ

蒙鑒定

春夏秋冬之間於萬八
百川兩樓上に不論晴
雨書畫大會興行仕候

四　明　仲

行司　蜀山人　直次郎

寛齋　小左衛門

大關　鵬齋　文左衛門
關脇　詩佛　柳太郎

大關　文晁　文五郎
關脇　五山　左太夫

小結　痴齋　文一郎
前頭　星池　源藏
前頭　綠陰　良助
前頭　可菴　榮之助
前頭　南湖　門彌
前頭　善菴　カナエ
前頭　南嶺　猪三郎
前頭　赤水　忠藏
同　竹谷　甚三郎
同　澤瀧　源助
同　圭齋　幽溪
同　竹沙　呉主膳

小結　米菴　三亥
前頭　董堂　加右衛門
前頭　如亭　門作
前頭　因是　健藏
前頭　金陵　金之助
前頭　榕齋　九兵衛
前頭　雲潭　祥藏
前頭　鳴門　一善
同　雲峯　治兵衛
同　克明　忠藏
同　董烈　甫田
同　梅逸　名藏

同　赤城　文太郎
同　東原　右膳
同　椿年　幸之助
同　大浪　七左衛門
同　文承　重次郎
同　月窓　世達
同　東里　文二郎
同　閑林　忠次郎
同　親孝　新助
同　玄機　林泉
同　翠溪　德三郎
同　玉川　雄八

同　嵩嶽　英助
同　西湖　庄二郎
同　交山　文左衛門
同　曲河　むらじ
同　蠣潭　藤之進
同　玉山　和氣
同　玉峯　收藏
同　大岳　榮助
同　向陵　定吉
同　武陽　九儀
同　詩禪　伯兎
同　細菴　新吉

同　花山　のぼり
同　寛快　彌次衛門
同　徠山　生兵衛
同　南谷　長六
同　鐘山　武助
同　圖南　東次郎
同　藏六　千吉
同　鈴木　芙蓉
同　勤齋　重藏
同　鍬形　齋
同　晉齋　榮吉
同　南溟　宇吉

同　金山　青木
同　鹿谷　九二郎
同　雪峯　德三郎
同　水齋　順藏
同　龍山　主計
同　芳溪　不言
世話役　佛菴　彌太夫
同　螻齋　藤藏
同　雪齋　老公
勸進元　抱一　上人
同　桐隱　公子
同　月潭　清兵衛

同 西嶽 介藏
同 文掛 文二郎
同 梅嶺 香二郎
同 舒中 源三郎
同 西山 圭之助
同 琢齋 良菴
同 恭齋 三千太郎
同 五溪 三彌太
同 漾齋 玉二郎
同 星城 光助
同 醉雪 卞五郎
同 芥舟 竿三郎

同 董齋 其一郎
同 松溪 長三郎
同 醉石 彥六
同 鏡山 孫助
同 松雲 尚太夫
同 月釣 水右衞門
同 墨溪 里五郎
同 星塢 乙吉
同 圭介 久郎
同 葛嶺 政右衞門
同 清河 鮎之助
同 抱 大藏

同 桂齋 松太郎
同 昆門 吉兵衞
同 魯仙 味之助
同 雪齋 勘二郎
同 浩然 松藏
同 雪旦 長之助
同 甫田 藤兵衞
同 苔溪 千藏
同 雲峯 源太郎
同 峰品 由之助
同 青齋 梅右衞門
同 松堂 門兵衞

同 竹窓 獨之進
同 函山 何右衞門
同 雪古 梅藏
同 香雪 竹藏
同 竹莊 筍一郎
同 羅漢 五右衞門
同 雲壽 兎八郎
同 雪隱 酉藏
同 春里 梅太郎
同 黄山 蘭二郎
同 雲英 雷藏
同 榛野 繁八

同　竹溪　鶴三郎
同　羅浮　佛右衛門
同　梅窓　者二郎
同　若雪　向五郎
同　松巖　卜藏
同　關鱗　降藏
同　金恭　助八
同　檀固　萬藏
同　叉履　斧右衛門
同　抱眞　一右衛門
同　晴齋　泰助
同　星山　空五郎
同　淩處　吉之助
同　雪屋　酒藏
同　東山　太兵衛
同　竹鵠　卯之助

此外中前關人東西に御座候

素山堂藏板

●蜀山人拾遺

今や此篇を終るに際し。一言せざる可らず。翁は素より一偉物たるには相違なかりしなり。されど其理想は偉大なる能はざりき。從つて其人物をいふも一箇の好漢たりしといふに過ぎざるべし。翁が名は狂詩狂歌によつて天下に鳴れり。蓋此才に至つては古今獨歩の讃辭は優に翁が頭上に月桂冠を飾るに至るべし。風來かつて翁が詩文を許して曰く『直至開天域辭藻妙總云々』と。古賀精里其人物を許して曰く『南畝は實に輕俊の才子にして。學問も亦純正ならず。但其人如何なる大人君子に對するも。毫も諂諛の氣なき一節のみ捨つ可らず』と。浪華の詞名南宮も亦曰く『蜀山多材阿房資。搆世所以稱翁大家也』と皆共に翁を許して其正鵠を射たるものといふべし。殊に余は古賀精里の烱眼に服せざる能はざるなり。

翁は常に自ら究して。當時名家の說をたゝき。內藤忠明が內安錄に

曰く。

太田覃より塙保己一に。徒然草の諸集大成は。よく委敷註を書たるものにて。見るによきものと存候。いかゞと問ひければ。徒然艸を書たる兼好は。諸集大成に書たる程のものは知るまじきとて笑ひき。

翁はかくの如く當時名家の説を聞くを喜び。瀬田問答の如き其顯著なるものたり又朋友たりとも其語る處を決して等閑にきかず。悉く記して其雜筆に傳へたり。

翁は又批評眼をも有せり。其著俗耳鼓吹は悉くこれ翁が明快なる批評と稱するも可ならんか。

著書巴人集の後序を見るに曰く

巴人集は四方赤良が家集なり。(云々とありて巴人集の名につきて)宋玉が陽春白雪は和するもの少く。下里巴人は和するもの多しといへることばあり。四方の家の紋扇に三ッ巴あり。かれこれ合せて名付たる歟。四方山の話にかけて四方山人ともいひ。或は丈夫四方の志をいたく思いれなきにしもあらず。委しくは先の辻番にとふべし

天明四のとし皐月十あまり八日　　たれかしるす

たれかしるすといへれどこれ確に蜀山翁自身の筆たるや論なし。而して此後序中吾人の注意をひけるは。或は丈夫云々の言葉なり。これ果して翁の精神のある處なりとせば。翁も亦此一語を以て既に尋常の迂夫にあらざりしを見ん。去れどこれを以つて翁を許する素より其當にあらざるべし。純然たる傳記としてこれを世に傳へんか。余は猶ほ茲に擱筆する能

はざるなり。唯これ彼に關する一般の評論のみ。或はこれ評傳と稱するものならんか呵々

蜀山人終

附錄

蜀山百首

此百首は吾家狂歌の髓腦なりと蜀山翁の自信せる處のものなれば。今茲に附錄として掲ぐるの價値充分なるを信ず。內數首は本篇前出のものもあれど。敢て重復を咎むるにも及ばざらんか。

春

あら玉のとしのはじめの福壽草
　祿といふ字はろの中にあり

生酔の禮者をみれば大道を

よこすおかひにはるは來にけり

みわたせば大橋かすむ間部河岸
松たつふねや水のれり梶

春がすみたちくたびれてむさし野の
はら一ぱいにのばす日のあし

慈悲心も佛徒僧も一聲の
ほうほけきやうにしくものぞなき

子の日する野邊に小まつの大臣は
いまも賢者のためしにぞひく

まな板のこぐちにはれる青紙の
いろも若菜にれよぶものかは

れれをみてまたうたをよみちすかと

梅のれもはんこともはずかし

ふみこのむ木を右にしてやり梅を
ひだりにかざず御代ぞかしこき

一刻を千金づゝよしめあげて
六萬兩のはるのあけぼの

すみだ川のちのあしたも細見の
山がたなりに歸るかりがね

何なりとこのめはるさめふり袖の
新造まじりゐつゞけの客

青柳はめはお眉髮てくもありて
前のなきころうらみなりけれ

ところ〴〵ふし〴〵ありてなまよみの

甲州いとに似たる青柳

一めんの花は碁盤の上野山
　黒門前にかゝるしら雲

風のいるすきまもみえぬ山ざくら
　櫻が山かやまがさくらか

さかづきもさすが女の節句とて
　もゝのあたりに手まづ遮る

山吹の口あじめじやもらんとて
　れたま杓子も井出の玉川

杜若むかしはいせの物がたり
　いまはめでたくひらく三河記

上からも下からもまた花とはな

　あはせかゞみが池のふぢなみ

夏

春なつのちかしき中は猶さらに
　かきをせよとやさける卯花

この神のわけいかづちぞありかたき
　あふいでも猶あふいでも猶

ほとゝぎす鳴つる跡にあきれたる
　後徳大寺の有明の顔

いかほどにこらへてみても廓公
　なかねばならぬむら雨の空

鎌倉の海よりいでしはつ鰹
　みなむさしのゝはらにこそいれ

早乙女の脛のくろきに仙人も
　通をうしなふ氣づかひはなし
のぼり竹すぐなるよとは上下の
　麻の中なる蓬にぞしる
さみだれにいたゞく空の底ぬけて
　水たまらねば屋根ももる殿
人なみゝ窓の螢はあつめても
　しりからもゆる火をいかにせん
惟光がたちながらくふ蕎麥のいろ
　いよ／＼くろし夕顔の花
撫子の后のお名にさしありて
　まはしにとれる床夏のはな

いつわりのなきよなりせば本なれの
　西瓜の皮に穴はあけまじ
質藏にかけし地赤の虫ばしは
　ながれもあへぬ紅葉なりけり
去年から氣を張りつめし氷室
　守こよひや心とけ／＼とねん
こゝろだにちのわのごとくまろからば
　くゞらずとても神や守らん

秋

風鈴のりんとひゞきし秋かせは
　萩の上はの一文の錢
天の川ながれわたりのもろかせぎ

　　牛をひこぼしはたをれり姫

白川のれ關所ならはなが榧の
　　なかあらためてみやぎのゝ秋

女郎花口もさがのにたつた今
　　僧正さんが落なさんした

花すゝきほうき千里のむさし野は
　　まねかずとてもたみのとゞまる

大空にかり〳〵〳〵の聲するは
　　たが書だしやかけてきぬらん

秋はてばやがてもみぢの吸物と
　　なるともしかとしらで鳴らん

しらずろたれをかうらむ朝顔は
　　たゞるりてんのうるほへる露

かくばかりめでたくみゆる世の中を
　　うらやましくやのぞく月影

分里の雲さへはれてそろばんの
　　たまの三五の十五夜の月

清書もあがる二度目のつきかげは
　　また一段と見事なりけり

大菊をめづる狂歌ははな紙の
　　こぎくを打てかくもはづかし

七百の慈童もありときくの花
　　高野六十那智は物かは

龍田山こぞの枝折は林間に

酒あたゝめてしれぬもみぢば
れはしたつたがしりをもみぞばの
うすくあく屁にさらす赤はぢ
秋のたのかりほの庵の歌がるた
手もとにおりてしれぬ茸狩
歸んあんいざとで入し里の名は
たゞ落栗の音にのみきく
子をおもふ朝三暮四の猿の尻
眞赤にひとつのこす枝柿
ひとつとりふたつとりてはやいてくふ
鶉なくなる深草のさと
もみぢちる萩や薄の本舞臺

まづ今日はこれきりの秋 一

冬

神〱の留守をあづかる月なれば
馬鹿正直に時雨ふるなり
掃除せぬ門の落葉をふみわけて
こそ〱〱と誰かとはまし
世の中はわれより先に用のある
人のあしあと橋の上の霜
袖の上に霜か雪かとうちはらふ
あとよりしろき冬のよの月
雪ふれば炬燵やぐらにたてこもり
うつていづべきいきほひはなし

一むれの奥女中かとみるまでに
　木ごとに花のわた帽子雪

駒とめて袖うちはらふ世話もなし
　坊主合羽の雪の夕暮

よし人は犬とやいふともふる雪に
　わがあとつけていでんとぞおもふ

空と海ひつたりつきの中川の
　はら〳〵松にたつ千鳥かな

さん水にひよみの酉の市ながら
　いもほり僧都なきにしもあらず

わけてはふめでたかり塲の物數も
　ありとやいはふ屋形尾の鷹

しろかねの臺にこがねの盞の
　花はいはずと人やすゐせん

淺草のうら白根松やぶ柑子
　だい〳〵ところ本たはら町

今さらに何かをしまん神武より
　二千年來くれてゆく年

年波の今やこえんと門〳〵に
　たてし師走の末の松山

戀

千早振神も御ぞんじない道を
　いつのまにかはよく敎へ鳥

疊ざんれきてまつばのかんざしは

おふみおもてのうらかたぞうき

たゝみこむ胸のおもひをいひかねて
ひねりし塵や山となるらん

れさらばとそむけし顔をむき玉子
きぬ〳〵糸のきるにきられず

おなうなぎいづくの山のいもとせを
さかれてのちにみをこがすとは

をやまんとすれども雨のおしじげく
又もふみこむこひのぬかるみ

うづみ火のしたにさはらでやはらかに
いひよらん言の葉烟草もがな

灰吹の青かりしよりみそめこし

心のたけもうちはたかばや

おはまくは瓜のはたけにねもしなん
とりつる履のうき名たつとも

世の中にたえて女のなかりせば
をとこのこゝろのどけからまし

雑

富士のねの表はするがうらは甲斐
前は北面のちは西行

すみだ川今は吾妻のみやこ鳥
業平などは在五中將

てる月のかたみをぬいて樽まくら
雪もこん〳〵花もさけ〳〵

全盛の君あればこそこのさとは
　花もよし原月も吉原

千早振神代のむかし面白い
　事をはじめしわざをぎの道

日の鼠月のうさぎのかはごろも
　きて歸るべき山ざともがな

世をすてゝ山に入るとも味噌醤油
　さけの通ひぢなくてかなはじ

おいた口戸ざゝぬみよのめでたさを
　おほめ申すもはゞかりの關

文月のふみもや通ふ神無月
　うらをかへしてあそぶ赤壁

すみよしの新田ふえてとし〴〵に
　おとじさりする岸の姫松

雀どのおやどはどこかしらねども
　ちよつちよとござれさゝの相手に

あぶかしい一葉にのれる蜘蛛をみて
　舟をつくりし無分別もの

いたづらにすぐる月日もおもしろし
　花みてばかりくらされぬ世は

ねてまてどくらせどさらに何事も
　なきこそ人の果報なりけれ

世の中はさてもせはしき酒のかん
　ちろりのはかまきたりぬいだり

よの中はいつも月夜に米のめし　さてまた申しかねのほしさよ

念佛を申すこゝろのやさしさは　鬼も十八だんりんの僧

鶴九百九十九ねんめ龜九千　九百九十九あゝ倘齒會

千年のつるの玉子をときはなる　松のとかへりかへすめでたさ

萬年とかぎれるかめも尾のながき　友にひかれて億兆やへん

附録終

著作權所有

明治三十四年七月十七日印刷
明治三十四年七月二十日發行

定價金十五錢
郵税金四錢

編輯兼發行者　東京市麴町區三番町五十三番地　上村才六
印刷者　東京市京橋區南紺屋町廿四番地　岡田鍊一
印刷所　東京市京橋區南紺屋町廿四番地　岡田印刷所
發行所　東京市麴町區三番町五十三番地　鳴皐書院

1116
699

[illegible]

勝間舟人著

蜀山人

鳴皐書院

特 146 699 2

085019−000−0

特64−298

蜀山人

勝間　舟人／著

M34

DBB−0450